
summer visit

河野夜兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

summer visit

【ZPDF】

Z3595V

【作者名】

河野夜兎

【あらすじ】

夏が来た。俺は彼女が言った「頑張る」と一緒に頑張るって決めた。僕は進んだ時間を振り返る。そして……。そんなひと夏のお話。

走り始めた二人

「自転車は、自分で転がる車だから自転車！」

俺の自転車の後ろ つまりは荷台に座り、ソーダ味の氷菓子を片手に突然叫ぶ彼女。

「自分で転がるって、いまいち…いや、全然意味わんねえし…。つーか、自転車はきっと」

そういう意味合いで名付けられたんじゃねーだろ…と、俺は盛大にため息をついて、自転車のペダルをせわしなく踏み回す。

歩道と車道の境目であるコンクリートブロックなんて親切なものは皆無、整備無縫な田舎の旧道。

彼女を乗せて走らせる自転車の右側の景色は、山 萎びた旅館
山 空き地 時々民家の繰り返し。

大して田を引くものなどない、退屈な景色だ。

左側は海岸線。

どんな角度から見ても真っ直ぐな水平線は青ではなく、青みを帯びた灰色だ。

境界線上の空は乱雑に擦れた白い雲と、水で絵の具を極限に薄めたような、かるりじて青に見える青。

海岸線には延々と白い砂浜、間隔を置き海へ向かい延びるようにな

積まれたテトラポット。海沿いに住む俺達にとっては、なんのことない、見慣れた景色だ。

「アイス…なくなっちゃった…」

食べ終えた氷菓の棒を咥えながら発しているだらつ彼女の淋しそうな声が背中から耳に届いた。

「はいはい、そりゃ残念な

まるで幼子に向けるように、小さく笑みを含めて短い言葉を彼女に投げた。

きっとその言葉は、風圧にかき消されて彼女には届いてはいないだろつけれど。

どこまでも起伏のないだからかな海沿いの道。ペダルを踏み込み向かう目的地は、俺にとっては一年とちょっとぶりで、彼女にとっては初めての場所になる。

中学から愛用している銀の自転車に彼女を乗せ、『特別な二人』として過ごし始めてかれこれ三ヶ月と半月が過ぎた俺達は高校一年生。

そして現在は、七月終わりの夏休み初頭、午前八時過ぎ。

前籠に彼女の小さなサンダル。時々舗装状態の悪いアスファルトで小さく跳ねる車体と共に、同じリズムでそれも小さく跳ねてる。あと五分ほど。この繰り返しの退屈な景色を抜けたら一人の目的地。

五分後には、萎びたこの退屈な町から、少し賑やかな海沿いに横

並びの觀光町へたどり着く。

サーフショッピングに海の家。売店や小綺麗な民宿に、大型の旅館。そして、目的地である小さなカフェハウスがそこにある。

「止まつて……！」

彼女が大きな声で突然叫ぶ。その声は、不安混じりというより、不安の塊みたいな声だつた。

(全く往生際の悪い…)

俺は、彼女に聞こえないよつて小さく鼻を鳴らして、聞こえないふりをした。

背中をグーで叩かれたけど、無視してペダルを回す。

喚きながらかなり力をこめ俺の背中を乱打する。その声は今にも泣き出しそうで…。

11

盛大にため息をついてペダルを回す足を止めて、左ブレーキをゆっくりと握った。

自転車が止まると、一気に暑さが体にまとわりつき、体が熱を上げて汗がじわりと滲む。

しかし早朝とはいって、日を浴びたアスフ

アルトはやつぱり裸足では熱いようだ、一、二、三跳ねると慌てて荷台に飛び戻った。

「ここまで来て、逃げ帰るのか？」
蒼

少しだけ口調を強めて、振り返らずに彼女に一言尋ねた。

「…逃げてないもん…逃げてなんか…」

彼女は萎れた声で呟き、俺の胸に回した両手に、ギュッと力をこめた。

「ちょっとだけ休憩したかっただけだもん…。ちゃんと大丈夫だもん…ちゃんと…」

明らかに上ずつてる声を聞いて、やれやれといつ気持ちをこめて小さく笑った。

「大丈夫だよ」

懸命に堅く握られた白く小さな両手に、右手をかぶせるよつて乗せて一言、彼女の耳にちゃんと届く音量で声を放つ。

「ちゃんと傍にいるから」

重なる手は直射日光を受けてることもあり、否応なしに熱い。でも、自分のものではない熱 温度を感じられることが、今の彼女の緊張や不安を溶かす最善の策だつて俺は知ってる。

「北村あ…、私…変な子…。だから…嫌われるかも…」
自信なさげな彼女のぐぐもつた声に、

「大丈夫だつて…。変な奴が大好物な変わり者だつて、世の中には結構いるもんだ」

目的地でそわそわして俺達を待つてゐるだらう」一人を思い浮かべて、込み上げる吹き笑いを堪えた。

「そんな北村も、変わり者。私なんかのこと、こんなにも一生懸命…」

彼女の両腕に再度力がこもる。背中に感じる彼女からの温度と柔らかさ。

密着されるとかなり暑いし、軽いめまいと動悸におそれるのは、夏のせいだと思いたい…。

「別に… それほど一生懸命じゃない。ただ、自分がそうしたいと思つたことをほどほどにしてるだけだ」

照れ隠しの言葉だとはバレたくないけど、いつもより変に堅苦しい言い方で気付かれるかな…。

俺は、自分自身に小さな苦笑を落とした。

「ありがとう…。北村、私…、私つ…！ がんばる～つつ…！」

自分に気合いを入れるかのように叫び、彼女は自転車を走らせるよつ急かした。

そんな彼女に、小さく「がんばり」って呟き、再度ペダルを踏み込み目的地までの一本道を走りだした。

相変わらずの僕

「もひそろかなあ？」

先刻から店の時計を何度も見上げては、ソワソワしながらダスタークロスでカウンターを拭く葉月に僕は、

「ちょっと落ち着こいが…」

と、厨房からアイスコーヒーを差し出した。

「そんな事言つ洋一だつて、さつきから何回も時計を見てる」とは
バレバレだよ~」

葉月はにんまりと笑ってアイスコーヒーを受け取り、カウンター
席に腰を下ろした。

(相変わらず見てなによつて、細かいところを見てるな…)

僕はやれやれと苦笑いしてアイスコーヒーを飲みながら、厨房か
ら葉月の隣へと移動した。

「そわそわせずにいられないよね~っ！ 充月^{みづき}が彼女を連れて来
るなんてつーー！」

葉月はストローでグラスに弧を描き、氷の鳴る涼やかな音色を奏
でながら、絶え間なく頬や口元を緩ませている。

「充月君とは一年ちょっと振りくらいいかな…。せつと更に男前になつてるんだろううね」

葉月の弟の充月君と会つのは昨年の春、高校進学の祝いにと彼を店に呼んで、葉月と僕と三人で夕飯を食べた日以来だ。

あの頃の充月君は高校生と言うよりも、中学生の幼さが残り、まるで葉月の弟とは思えない程真面目でシャイで口数が少なかつたな…。

「充月は姉の私が言つのもなんだけど、超イケメンになつたよ～」

葉月はふふーんと自慢氣に笑つた。

「中学の時は童顔チビだったのに、高校入つて急に身長がグイッと伸びて、すごく男っぽくなつちゃつてね～ 我が弟ながら、田の保養になるなる～」

(…田の保養になるなる～な彼氏じゃなくて、申し訳ない…)

思わず込み上げる僕の苦笑いを見て葉月は、

「洋一はイケメンでなく、その平凡なところがいいのつ」

夏の太陽の下で揺れる、向日葵のような笑顔が僕に向けられる。
…平凡…か。

「平凡が一番いいのつ。だつて、彼女がいれど、まだ若いシングルなのにこんな素敵なかフェのオーナーで、プラスイケメンだつたら、私はきっといろんな心労に負けちゃうわよ…」

葉月は小さく口を尖らせながらアイスコーヒーを一口飲んでため息を落とした。

「色々心労が多いのは僕のほうだよ…」

僕は更に苦笑いして、また今年も近所である民宿『波音』にて住み込みの短期アルバイトに来ているはじめ君を思い浮かべた。

はじめ君は相変わらず葉月田当でティータイムの時間には欠かさずここに休憩にやつてくるのだ。

毎日毎日葉月に果敢にアタックをかけては玉碎して、僕に毒を落として帰っていく。

全くもって迷惑だけど、根は悪い人ではないので嫌いではなかつたりする。

それだけじゃない。

葉月の屈託のない笑顔と明るさに惹かれてここへ足を運ぶお客様は、結構いるわけで…。

（内心は…穢やかじゃないんだな…）

僕は無言でアイスコーヒーを喉に流しこんだ。

「洋一、何？ 難しい顔しちゃって」

葉月は僕を覗きこみ、小ちく笑みを浮かべた。

「…なんでもないよ」

「まだに互いの顔の距離が近づく事にギヤマギヤしてしまつ弱腰な僕に、

「洋一…、顔赤い…。そうこうの、いつままでギヤドギする…」

囁く葉月の唇は、薄いピンクのグロスで柔らかくも艶やかな光を放つ。

二十歳を過ぎると女性はどんどん大人の輝きを増すものなんだな
と心から思つ。

出会った頃の葉月は可愛いがとても似合つ溌剌が全面に押し出された女の子だつたけど、今の彼女は可愛いではなく綺麗といつ言葉のほうが良く当て嵌まる。

それだけ、僕らの時間は進んだんだってことを実感せずにはいら
れなかつた。

「ねえ、洋一い...」

葉用はあるで何かを強調するような声で僕の名前を呼んだ。

1

何を強請られたか、察した というより、きっと僕も葉月と同じ気持ちだったと言つたほうが正解だろう。

開店前。一人きりの静かな店内。BGMは相変わらず彼女が愛して止まないあのグループのポップなラブソング。

近づく僕ら。

月をゆづくりと閉じる葉月

カラソカラーン！

「！」

カウベルが激しく鳴り、僕らは目を見開き、ほぼ同時に入り口に

顔を向けると、

「邪魔なら……、一田由よつ……か？」

「……」

入り口に立ち、眉間にシワを寄せて苦笑いする、

「みみみ充月君つー?」

僕は立ち上がり、上昇する顔の熱さを笑って誤魔化した。

「…タイミングの悪い弟」

葉月は小さく舌打ちをして充月君をジロッと睨んだ。

「……」

充月君の後ろには、顔を赤らめ、茫然自失気味で僕らを見つめる
女の子が「公然猥褻……」とつぶやき、ゆっくりと後退りし始めていた。

悪態と苦笑とKYOUな姉

（なんか気まずいな…）

とりあえず出されたアイスコーヒーを無言で飲みながらチラリと彼女に視線だけ向けると、仏頂面でアイスティーに刺さるストローをくわえたまま、じつと厨房内の洋一さんを睨み付けている…。

そんな視線にひたすら苦笑を浮かべる対面の洋一さんから（助けて欲しい）的な視線が姉に向けられるけど、華麗にスルーされてるし。

そんな姉はというと、カウンターで彼女の隣に座り「ワクワクしてますよっ！」と謂わんばかりに満面な笑みを浮かべて彼女を見つめている。

「…けど充月君。本当に久しぶりだよね？　身長、何センチ伸びた？」

沈黙と彼女のガン見に耐えらなくなつた洋一さんは、俺に話題を振ってきた。

「…今176センチだから15センチ位は伸びました」

そう告げてやんわり笑つたら、

「充月の身長なんてどーーでもいいわよっ！　ねえねえっ！　彼女名前なんていうのっ！」

姉は待ちきれないといつオーラを発して隣の彼女に言葉を発した。

「昨日メールで教えただろ…」

「充月には聞いてない！」

俺の言葉を即シャットアウトする姉に、すげー理不尽な扱いだと盛大にため息をつきくなつた。

そんな俺を見て、洋一さんは（お氣の毒様…）と言いたげな苦笑を見せた。

「…蒼…。そら進藤蒼しんじゅうあらといつ名前ですが…」

彼女 蒼は、ストローを口から放して、照れ隠しにストローの包み紙を指にくるくると巻き付けながら小さくつぶやいた。

「そらちやんかあ かわいい名前つ。…で、充用とせうようとせびり今までいつたの?」

「…姉ちゃん…、マジ頼むからさあ…」

俺は姉をジロッと睨み付けて牽制した。

「…昨日は北村と自転車で南町駅前のフアミコーレストランまで行ってみました」

（つーか、どこまでいったの意味が違つだろ）と思つたが、姉や洋一さんに慣れるには会話をするのが一番手つ取り早い。だから、とりあえずは黙つて聞くことにした。

「それから一軒隣の複合型ショッピングビル内2階にある『遊べる本屋』と称されるヘンテコ雑貨屋のキモカワ老人形と曰一杯戯れた後、4階にあるペチットショップの隅で北村と向き合こキ…」

彼女は急に会話を止めて、アイスティーを飲む為にストローをくわえた。

「…キ？…まさか…月と…キス？」

そのペッシュ・ト・ショップの隅でセイラちゃんは充

月とキズ?

姉の瞳がドキドキと期待で輝きを放つ。

「キンギョを見ました。私と北村は破廉恥な公然猥褻をするような、どへンタイではありませんので」

そう告げて洋一さんを再度睨み付けた。

「…蒼、ちよつと言い過ぎ。つーか、わっからやたら洋一さんこ
悪態つくるのはやめやつて」

「これだけ露骨に洋一さんに対する態度が悪いと、さすがにマズいだろうと思った俺は、蒼に少し強い口調を放った。

۷

蒼は、口を結んで視線をグラスに落とした。

「……蒼ちゃん……、洋一の」とあまり良く思つてない……？」「めんね」

姉は寂しさ混じりの複雑な笑みを浮かべてつぶやいた。

そんな姉のつぶやきに反応する気配を見せずに蒼は俯いたまま、アイスティーグラスを見つめ続けた。

「なんだか申し訳ない……」

洋一さんも複雑な笑みを浮かべて小さくつぶやいた。

「いや、違うんです。あの……実は、蒼は……」

俺は蒼の『心の事情』を一人に打ち明けた。

スタートライン。思い出す僕。

「男性…恐怖症…？」

葉月はそつぶやき、僕の顔を見て戸惑いの表情を浮かべた。

「ああ…。しかも大人限定の…ね」

充月君も僕に視線を向けて苦笑いを浮かべた。

「なんでもまた…大人限定って…」

葉月は蒼ちゃんの横顔を少し不安げに見つめてつぶやいた。

蒼ちゃんは視線を下に落として、ストローの包みを指に巻き付けて、手遊びをするけど、無言、無表情のまま。

「詳しい理由は…」「めん…。聞かないで貰えたら助かる…」

充月君はグラスに視線を落として弱々しい声を落とした。

「治したい…。だからここへ来たのです」

蒼ちゃんは、萎れた小さな声でそつぶやいた。

「北村が言つてくれたのです。ここで色々な人に触れたら、怖いとか、気持ち悪いとか…きっと大丈夫になるって」

蒼ちゃんの言葉で何となく察しがついた。

充月君は、僕らを頼つてここへ訪ねて来てくれたということを。

「洋一さん…、あの…」

充月君は椅子から立ち上がり、僕に真っ直ぐな視線を向けて、

「夏休みの間、蒼と俺に店を手伝わせてもうらえませんか？」

と言い、頭を深々と下げた。

「…手伝ってくれるのは、本当にありがたいよ。これから忙しくなるから、葉月と僕と一緒にじゃ、ちょっと不安だしね…」

僕は充月君をしつかりと見つめて、言葉を続けた。

「でもね、僕は一応遊びで店をやつてるわけじゃないから

本当はこんな事、言いたくない。でも、僕は充月君の心構えと意志が知りたかったから、僕の店に対する気持ちもちゃんと伝えようと思った。

「このお店は、お客様が来てくれることで成り立ってる。お客様が、この場所で僕の作る料理や葉月が作るこの場所の空気を好きだと思ってくれてるからこそ、足を運んでくれてるわけだ」「

勿論、先代である父から受け継いでる大切な常連さんもいるし、心構えだつてある。決して僕だけの力ではなくこの店は色々な『思い』で成り立つてる。

でも、そんな難しい話まではするつもりはない。

「俺も蒼も遊びで手伝ひつもつはないです。やらせて貰えるなり、一生懸命ります」

充月君の瞳は、とても真っ直ぐで、僕は思わずつむぎの店に初めて

バイトに来た頃の葉月を思い出した。

流石とこりかなんといつか…。やつぱり姉弟、顔の作りはちょっと違ひけど、纏うものは良く似てるなと感じて、思わず笑みが漏れそうになつた。

「蒼ちゃんは？」

僕は、蒼ちゃんに視線を向けて様子を伺つ。

「ちやんと頑張ると決めたから、頑張ります」

「あら、いがこもるといひよりは、何だか僕に果敢に挑もうとするような瞳だつた。

大きな二重瞼に少し色素の薄い茶色の瞳。
ふうわりとした葉月のセミロングとは対照的な真っ直ぐで黒いショートヘア。

淡いブルーのキャミソールの下の肌は驚くほど細く、まるで田の光を一切受け付けないような、透けるような白い肌だ。

見ただけであまり外気にふれていないとがよく理解できる。

（きっと、ここに来るにまで気持ちを持つてくるのは容易ではなかつただろうな…）

先刻から彼女が僕に放つ殺氣にも似た空氣で、何となくそつと思つた。

僕は、厨房からフロアに移動して充月君と蒼ちゃんの前に立つた。充月君は蒼ちゃんに椅子から立つよう促して、一人揃い僕に体を、視線を向けた。

「明日から、朝八時に店に来てください」

僕は一人にそう告げた。

「出来れば今日から」「今日は無理だよ」

充月君の言葉を遮つて言葉を放つたのは僕ではなく葉月だった。

「残念だけどね、蒼ちゃんの格好は『働く』に適しないから」

葉月は小さく笑みを浮かべて、蒼ちゃんの足元を指した。

「サンダルはアウトなんだよね。あとね、露出の高いキャミソールもね」

蒼ちゃんの頭をそっと撫でて、

「カフフの仕事ってね、服装も大事よ。お客様相手にサンダルは失礼だし、何より厨房とフロアを行き来する時、危ないんだよね」

葉月は「ちよつと来て」と蒼ちゃんの手を引き厨房へと入った。厨房の奥には小さなシンクと食洗機が設置されていて、床は水に濡れた状態だ。

「ここで作業をして、フロアに出るのも当たり前にあるんだよ。よし、フロアに行こう」

葉月は少し説明した後に、さじで蒼ちゃんとフロアへ戻る。

厨房とフロアの境目にはマットが置いてあり、そこを踏む形になるわけだが、

「あつ！」

マットからフロアに足を置いた瞬間、蒼ちゃんはツルリと足を滑

らせて声を上げた。

勿論、そういうことを知っている葉月は蒼ちゃんの体を支えて「ねつ？ 危ないでしょ？」と笑いかけた。

「よくわかりました」

蒼ちゃんは俯いてほんのり顔を赤らめてつぶやいた。

「キャミソールがダメな理由はね……」

葉月は、「コーヒーを運ぶトレイにお冷やひとしほりを乗せて蒼ちゃんに渡して、

「充月、ちよっとそこのテーブルに座つて」

充月君に指示を出した。状況がイマイチ飲み込めないという顔色を伺わせつつも、充月君はテーブルに腰を下ろして様子を探るような視線を葉月に向けた。

「蒼ちゃん、このトレイを持って、充月をお客様だと思つてお水とおしほりを出してみて」

「は……」

蒼ちゃんは戸惑いを見せながらも、葉月に言われた通りにお冷やとおしほりを充月君に出した。

「……」

充月君はその蒼ちゃんの前屈みの姿勢にギョッとした後に顔を赤らめ、「

「ダメだつ！ キヤミンール絶対ダメっつ……」

立ち上がり蒼ちゃんに激しく言い放った。

「？？？」

蒼ちゃんは状況が理解できず、訝しげに首を小しゃくひねつた。

「蒼ちゃんはビビしてかわからぬみたいだね。でも、充月君、説明してあげなれ～」

葉月はにひひと楽しげに充月君に笑いかけた。
そんな葉月を懶々しげに睨み付け、

「…………」

蒼ちゃんの耳元で小さく状況をつぶやいた。

「…………」

蒼ちゃんは真っ赤になつ、トレインで胸元を隠して充月君に向かつて「！」の変態…」とつぶやき、わなわなと震えた。

「ちよつー、誤解すんなよー、俺だつてわざと見たいわけじゃなくてー、ちよつど田線の先につー、そのつー！」
慌てて弁解する充月君を見て、

「ね？ キヤミンールは働くこふわわしくないでしょ？」

葉月はクスクスと笑つて蒼ちゃんの肩を叩いた。

「肝に命じます…」

蒼ちゃんは充月にフンニンと鼻を鳴らしてそっぽを向いた。

そんなやり取りを見て、僕はまた思い出す。

(葉月も最初、同じ失敗をしてたよな…)

四年前、十七歳の葉月も、蒼ちゃんのよつよつと顔を赤らめてあたふたしていた。

この四年で葉月はすっかりこの店のフロアの主になり今、田の前の若い一人にレクチャーしている。

何となく時間の流れをいつもよりはつきりと感じて、嬉しいやら少し切ないやう…。

僕の胸の中に言い表わしよつのない不思議な気持ちが込み上げた。

ランチタイムの見学

明日から洋一さんの店を手伝えることが決まり、今日はもう帰るつもりでいた俺達に、

「ふたり共、せっかく朝早くから」ひちに来たんだから一緒にお昼くらいは食べていきなよ～つ

「そう姉に引き止められて、ランチタイムの仕事を見学がてり、俺達は昼食を「」馳走になることとなつた。

人で店内が賑わうランチタイム。俺と蒼は入り口左側の一人用の席で店内の様子を眺める。

なるべく人目に触れないように、蒼は入り口に背を向けて座る。少し不安そうな顔を見せたが、「北村が正面にいてくれるから大丈夫」と小さく笑つてひとつ頷いた。

入り口右側には雑誌や新聞が整理されてるこげ茶色の木製の本棚と、葉が細長く、少し背が高い観葉植物が置かれている。

横に広い出窓から見えるのは、人で賑わう海水浴場の景色。

出窓に並ぶ水色のガラスポットには薄緑が綺麗なポトスが植えられてて、なんとなく目を癒してくれるような気持ちになつた。

カウベルが鳴ると、姉はどびきりの笑顔でお客さんを「いらっしゃいませ～」と出迎え、無駄のない動きでトレイに氷水とおしづりを乗せて運んでいく。

姉のアイボリーのカフエプロンのポケットにはボールペンと云
票が挟まれた板。

お客様から注文を受けると、颯爽とカウンターへ歩き、厨房の
洋一さんへと明るく張りのある声でオーダーを通す。

蒼は横目でチラチラと厨房内の洋一さん姿を追っている。

「…洋一さん、悪い人じゃなかつただろ?」

俺の問いかけに、

「…わかんない」

蒼はやんわりと首を左右に振り、小さな苦笑を見せた。

「やっぱ…怖いか?」

「うん…。少しだけ…。でも、大丈夫。今日は私、気持ち悪くない
し震えてない」

両手を胸の辺りにかざして、握つたり開いたりして安堵の色を見
せた。

「それってさ、結構大きな進歩だよな」

何だか嬉しくなつて、思わず声のトーンが上がってしまった俺を
数秒見つめて、

「…北村は、本当に変わり者だね」

蒼は少し俯いて照れ笑いを浮かべた。

「今でも不思議だよ…。こんな私の隣に北村がいてくれることが…
とても不思議…」

蒼の照れ笑いが、みるとみるうちに申し訳なさげな苦笑へと変わる。

「別に不思議でも何でもないだろ?」

俺はテーブルに頬杖をつきやれやれと蒼に笑みを向けた。

慌ただしく鳴るカウベルに反して、どんどん「機嫌な声でお客を迎える姉を田で追いかける。

ランチに来る客層は、結構若い人が多い。カウンターに向かう中年層はきっと常連だらう。姉を「葉月ちゃん」と呼び、姉もなんの抵抗もなく料理を運ぶ合間合間に世間話をして笑ってる。

小さい頃から人見知りが激しくさほど活発ではなかつた俺とは対に、姉は近所で有名な人懐っこいじやじや馬だつた。

その明るさと活発さで年寄りにしきたま可愛がられてたつくな。

「北村あ…」

蒼はつぶやくように俺の名前を呼ぶ。

「ん？ どした？」

姉に向けた視線を蒼へと戻すと、

「北村のお姉さん、ずっと笑つて疲れないのかな…？」

蒼の視線も、いつの間にか洋一さんから忙しく、楽しげに動き回る姉に移っていた。

「いや、あの人は万年箸が転んでも笑つてるタイプの人間だから、疲れないと…」

「…いいね、お姉さん。きっと毎日楽しいんだろうな…」

ため息混じりの蒼の寂しげな顔を見たら、自分に対しての不甲斐のなさが急に込み上げてきた。

(俺は蒼にたいした笑顔を『えてやれないもんな…』)

トレイをカウンターに置き、お密さんと会話を楽しみながら受けた注文の品が出て来るのを待つてる姉の後ろ姿を見る。

出来上がった料理の皿をトレイに乗せた後に、厳しい表情を緩めて小さく笑みをこぼし「よろしく」と姉に声をかける洋一さんを見る。

姉を送り出すと洋一さんはまた少し厳しい表情に戻り、厨房内で忙しくフライパンを動かしてる。

「いいなあ…。大変そうだけど、何だか楽しそうだ」

蒼は厨房の洋一さんを見つめて微かに笑みを浮かべた。

「…こや、お前はフロアの手伝いだから」

再度やれやれという笑いが込み上げた俺に、

「明日…私は一体何回転ぶだろ?…」

蒼は眉間にしわを寄せて口を尖らせた。

「…その前に、ちゃんと『いらっしゃいませ』が言えればいいな…」

小さく吹き笑ってやつたら、蒼は「つぬぬ…」と唸り、

「いらっしゃいませくら…言えるひー 北村つ、私を甘くみたら大ケガをするぞ」

頬を赤らめて膨れつ面で俺を睨み付けた。

「まあ、互いにケガのないよう」^{ヒツヒツ}氣をつけてやる」「
込み上げる笑いが止まらない俺を見て、蒼はますます顔を赤くし
て悔しげに唸り声を上げた。

(きっと大丈夫だ。姉ちゃんもいるし、俺もちゃんといるから)

確信なんてものは無いし、大した力も俺には無いはずなのに、こ
の時、元気な蒼を見て不覚にもそう決め込んでた。

小さな変化

忙しいランチタイムが終了を迎える1~3時ちょっと前。

厨房の真ん中、ステンレス製のシンク付きの調理盛り付け台には、大きめの白い皿が4枚。

調理台奥にはガスレンジ2つとフライヤーが1台。ガス台から少し離れた左端に業務用冷蔵庫があり、壁を一枚隔てた隣には小さな食糧倉庫がある。

調理台手前の、ちょうどカウンターの裏にある場所には小さめの調理台とシンクと右側に食洗機が横に並んでいる。

左側には、ホットコーヒー用のサイフォン式のドリップ機。その隣には朝一番を作るアイスコーヒーをストックしておく為の小さめの冷蔵庫がひとつ。

父がまだ健在でいた頃は、厨房の真ん中の調理台を挟んで僕が力センター側、父はガス台側にいて割り振りした個々の仕事をそれぞれでこなしていた。

あの頃は厨房が狭く感じて少し不便だと思ってたけど、父のいい今は一人ではちょっと広い気がする。

熱した2つのフライパンにバターを落とし、溶き卵を流し入れる。交互に手早く混ぜて、フライパンの柄を4~5度ほど叩きながら卵をまとめていき、半熟のオムレツを作る。

それを皿に盛ったピラフの上にひとつずつ乗せて、父から受け継いだデミグラスソースをたっぷりとかける。

その時、ふと視線を感じて、僕はフロアに目を遣つた。

「……」

一連の僕の動作を無言で食い入るように見つめる瞳は、蒼ちゃんのものだった。

しかし、視線が僕と合いつと、プレイとそっぽを向いてしまった。
（…料理に興味があるんだろうか？）

ふとやつ思いつつ、僕は少し遅い昼食の支度を続けた。

「充月、蒼ちゃん、もうすぐお昼ご飯だからカウンターにおいてよ
」
お客様が引いて静かになつたフロアに葉月の声が響く。
カウンターにはすでに紙ナプキンとスプーンがスタンバイされて
いる。

（素早いな。さすがは僕よりオムライスを愛する人だ…）
でも、そんな葉月が僕はとても好きだなと思う。

母を亡くしたと同時にフロアの主を失つた寂しいこの店に、再度
『光』を射し込んでくれたのは、おっちょこちょいだけど、いつも
元気に笑つて懸命にフロアで接客をしてくれた葉月だった。

そして、父が厨房に立てなくなつたあの日、この店を継ぐつゝで
決めた一番の理由は、葉月が「私は、アイビーのオムライスが世界
で一番大好きっ！」って笑つてくれたからだ。

お客様の笑顔は勿論大事だけど、僕は葉月の笑顔が一番大切な
だ。

それが、僕が日々笑顔で頑張れる理由なんだ。

カウンターに並んだ3人の前に、できたてのオムライスを並べる。

「お腹空いたよね？ サア、あつたかいつけひに食べよ～う」

葉月は、オムライスをじっと見つめる蒼ちゃんに弾む声を笑顔を向けた。

「いただきます…」

蒼ちゃんは手を合わせた後にスプーンを握り、オムライスをそろりとひと口食べた。

葉月と充月君は、真ん中の蒼ちゃんに視線を向けて様子を伺つてゐる。

「おいし…」

半日強張っていた蒼ちゃんの顔が初めてふわりと緩み、口元に小さな笑みがこぼれた。

「でしょ？ でしょ？ 洋一のオムライスはね、世界で一番おいしいんだからっ」

これでもか！ と謂わんばかりの『機嫌な葉月の笑顔。

「本当、すげー…うまい…。」

充月君からも笑顔がこぼれた。

「いいなあ…。私も…」

蒼ちゃんは、一瞬自分のつぶやいた言葉にはつとした顔をして、黙り込みオムライスをぱくぱくと頬張った。

「蒼ちゃん、…もしかして厨房の仕事に興味があるのかな？」

小さな反応が返つてくるかもしないと、思い切って聞いてみた。

「蒼ちゃんは、僕とは決して視線を合わせはしないけど、ゆっくりと小さく頷いた。」

「じゃあ、明日から蒼ちゃんフロアアジャなくて厨房に入つて中の仕事を手伝つてみたら?」

葉月はそう言って僕を見つめた。

「ちよ…それは無理だろ…」

充月君は葉月を見つめて、小さな息を落とした。

「何で無理よ? フロアで沢山の人を一気に相手して大変な思いをするよりも、まず洋一ひとりに慣れてみたほうが、私はいいような気がするけどなあ」

葉月はそう言ってオムライスを美味しそうに頬張り笑つた。

「…私…料理…やりたい」

蒼ちゃんは、スプーンを動かすのを止めて、

「厨房…入つてみたいですね」

ギュッと力を込めた、挑む瞳が、僕に向けられた。

「厨房の仕事は結構大変だし、最初は調理ではなく簡単な仕込みや盛り付けの手伝いだよ? それから、辛くなつたら絶対無理はしないつて約束できるかな?」

僕は蒼ちゃんの瞳の色を伺つた。

「はー！ がんばります」

「どうやら大丈夫みたいだ。今のところは。

「じゃあ、明日からよろしくお願ひします」「僕は蒼ちゃんに向けて、小さく笑顔を見せた。

「…」

蒼ちゃんは僕から視線を外して「お…お願ひしま…す」とつぶやいた。

やっぱりそんな簡単には慣れるわけないか…。

でも、朝よりは距離がほんの少しだけ縮まった気がして、僕は嬉しかった。

「よしつ、決まりだね つてことは…充月とフロアか…」

葉月はニヤニヤした顔を充月君に向けて、

「いいじゃない 私が充月を立派なイケメンウホイターに育て上げてやるうではないかっ」「

むふふっと張り切る葉月にじと目を向けて、

「…別の意味で結構不安…」

充月君は盛大なため息をついて首をやんわり左右に振った。

「がんばろう、北村」

蒼ちゃんのつぶやきに、充月君は複雑そうな顔で「お…う…」とつぶやいた。

夏の日射しと近い海

「暑いなあ……」

蒼の口から零れた迷惑そうな言葉。けど、それと反して、その顔はとても楽しげだ。

昼食を終えてカフェを出て、帰路の途中。
賑やかな場所から少し離れた人気のないひとき曇下がりの海岸へ少し寄り道することにした。

海は静かでいて、それでいて眩しくて広いなど改めて感じた。

海独特の、潮の匂いと湿り氣を帯びた生ぬるい風に包まれて、俺達は白く乾いた柔らかな砂に足をとられそうになりつつも、一步、また一步と足を踏み出していく。ゆっくりと波打ち際へと向かっていく。

眼前に果てしなく広がる海。太陽の光を水面に乱反射させながら、規則正しく浜辺に寄せては返す波。

身体中を包み込むよつこ響く波音を感じながら少し田を細めて、

「こんな近くに海を感じたのは、本当に久しぶりだよ……」
蒼は感慨深げな笑みを浮かべた。

「海の近くに住んでると、逆に無理して意識して海に触れなくてもいいような気がになるからな……」

それは気付いた頃からいつでも変わらずにある、いく当たり前の

景色だからと俺は思つてゐる。

だけど今日は、そんな当たり前の景色が少しだけ特別な景色に感じる。

それはきっと、俺の隣に蒼がいて、どこか満足げに笑つてゐるからだろう。

「良かつたな…」

心の言葉が声になり、驚くほど素直に俺の喉からこぼれ落ちた。

蒼は海風に吹かれて揺れる前髪を直しながら、俺を見上げて「うんっ」と頷き笑つた。

「……」

一人無言で、どちらからともなく繋いだ手。蒼は、ゆっくりとその手を握りす。

「……」

じつは、つまら言葉が出なくなるもんなんだなつてことを、俺は初めて知つた。

色んな言葉が頭に浮かんだけど、きっとどれも声にだしたら陳腐なものばかりだろうな…。

小さく苦笑をした俺に、

「明日のことを考え、ドキドキする」とができるつて、楽しいね

蒼は、瞳を潤ませて

「ありがとう。北村

俺の胸に顔をそっと寄せた。

同時に、心臓が早鐘のようになり打ち、上昇する体温と同時に息をするのがほんの少し苦しくなった。

「ありがとう…」

震え混じりの涙声を発した蒼の頭をそっと撫でて、

「お礼なんて言わなくていいから…」

今はそう言うだけで精一杯なくらい、信じられないくらい鼓動は速まり、軽いめまいすら感じた。

「北村がもし同じクラスじゃなくって、あの時に話しかけてくれてなかつたら…、私はずっと、ずっと苦しцままだった…」

蒼のつぶやきに黙つて耳を傾ける。

「あんなことがあって…きっと私はこれからもずっとあの人の影に怯えながら、ひとりぼっちでいなきやいけないって…」

「もう…いいから

俺は、なるべく穏やかな声で蒼の頭をそっと撫でた。

「お前は何も悪くないから…」

胸の中につっぽりと収まる蒼の細い体を両腕で包み込んだ。

どうか俺の言葉が蒼の心の深部に届いて欲しい。

蒼を苦しめて縛る辛い記憶から、心がほんの少しでも解き放たれればと強く願った。

「北村あ…、あつくるしーーーーー！」

蒼はぱはつ！ と息継ぎをして俺を押し退ける。

その顔は、尋常じゃないくらい赤くて、じつちまでつらりれて赤面しそうになつた。いや、多分俺もかなりだるうな。

「「めん…」

照れ臭くなつて苦笑混じりにしぶやいたら、

「クールダウンしなきやつ！」

蒼はサンダルを脱ぎ捨てて俺の手を引っ張り波打ち際へと歩き出す。

「ちょつ！ 待て待て！ 俺、スーカーだつて！」

「ひめかーいっ！ そんなこと関係ないっ！」

蒼は俺から手を離して、「とりやつ！」と背中を押す。けど、細くて非力で150センチ程しか小さい身長の彼女が、175センチの俺を動かすなんて無理だろ…。

ほくそ笑み蒼を見たら、凄まじく悔しがり、唸り声まで上げる始末。

「北村のKは、KY（空氣読めない）のKだなつ！」

そう捨て台詞を吐いて、波の中に突っ込んでいった。寄せる波が体に当たり、膝下の長さのジーンズが濡れてる。

「冷た～いっ！」

前屈みになり、手を海水につけて、叫び笑う。

「気持ちいいぞ、北村っ！」

俺に入つて来いと言いたげな視線を向ける蒼に、

「そりや良かつた良かつた」

愛想笑いで頷きながら、入るのは無理だといつぽんを出してやつた。

「なんだ、北村、金づちなのか」

蒼は挑発めいた言葉を投げて含み笑いを浮かべた。

「泳ぎは得意だ。ただし、靴や服を濡らすのは不得意だ」

鼻を鳴らしてそう返す俺に、蒼は「北村はつまんない男だな」とため息をついた。

むつ……、つまらん男だと……？

「ねえ、北村あつー！」

蒼は叫ぶ。

「私つ、明日から、自分の自転車で店に行くよー！」

蒼は、そう言って小さく笑顔を見せた。その小さな笑顔は、自信の色さえ伺えるものだった。

「……そりや」

つぶやいたら、なんか無性に海の中にいる蒼のもとへと走り出したい気分になつた。

「遅刻すんなよー！」

俺は叫びながら、波の中で笑う蒼へ向かつて走つた。

あ……、忘れてた。

「全くう……。みずくをこすだよね……」

厨房の中に入り、ランチ用の皿を片付けながら葉月は小さく口を尖らせた。

僕はいつものように、ティータイム用のシフォンケーキの支度に取り掛かりながら、やや不機嫌さを漂わせる葉月のぼやきに耳を傾ける。

「……ほんの少し前までは、隠し事なんてしないで何でも話してくれたのになあ……」

寂しそうにため息をつきながら苦笑いを浮かべる葉月を見て、僕は、

「……僕は充月君の気持ち、何となくだけわかるよ」

材料を混ぜ合わせた生地をリング状の型に流し込み、予熱を入れ終えたオーブンに入れて、一息つく。

「そんな僕に葉月はアイスコーヒーを差し出して、「それって、どんな気持ちなのよ……」

全く理解できないという顔を向けて、返答を待っている。僕はアイスコーヒーを一口飲んで息をつき、

「充月君も男だつてことだよ」

早朝に見た彼の真剣な眼差しを思い出したら、自然と口元が緩ん

だ。

「んんっ？ 何？ それじゃあ全然答えになつてないじゃないつ！」

葉月は不服そうな顔と声を僕に向けるけど、やんわりと笑みを返して終わりにした。

いくら大事な葉月にでも易々と言いつづもりはない男心があるってことだ。

大事な気持ちだからこそ、軽はずみに口にしたくない言葉つてあると僕は思つてゐる。

「…とにかく、僕はしばらく2人を見守つてやるつもりと思つ。できることをやりながら、ね」

曖昧な言葉で申し訳ないと想いつつ、僕は葉月にそれ以上は追及しないで欲しいな…と願いをこめて小さく笑つた。

「…洋一がそう言つなら、私も2人を見守つてみる」

多少の不服感は残しつつも、葉月は納得しようと僕に歩み寄るようになり笑顔を見せてくれた。

事情が全くわからない蒼ちゃんの男性恐怖症。しかも大人限定つてちょっと特異な感じに戸惑いを隠せない葉月の不安な気持ちを充分理解できる。

実際僕も不安だから。

蒼ちゃんの身に一体何が起きたのか…。

男性恐怖症という言葉に対し、僕は正直あまり想像したくない事を浮かべてしまつ。

異性を怖がるつて事は、相当シヨックな出来事を受けなければ、あまり縁のない感情だと思つから…。

「ねえ、洋一…」

葉月は珍しく真剣な顔で僕をじっと見つめて、

「…はじめ君には、事情を話しておいたほうがいいかもしないね…」

…

…しまつた。

角度を変えると結構危険な存在である、ウチの常連のはじめ君の存在を忘れてた…。

…

僕は思わず苦笑いしながら、

「そうだな…。はじめ君にはきちんと話しておかなきゃ…」

後に面倒なことになりかねない。

遠慮無しなあの物言いと、フレンドリーさと、好奇心の旺盛さは、蒼ちゃんや充月君の気持ちには逆作用してしまつ恐れがある。

オープンから漂うシフォンケーキの甘い薫りと共に、タイマーがケーキの焼き上がりを告げると、カフェの出入口のカウベルが来客を告げた。

ティータイムの15分程前の来客は、一々顔を確認しなくてもわかる人…。

「はじめ君が来た…」

葉月は、一瞬不安な顔を僕に見せたけど、

「一九四七年一月一日」

と、カウンター越しにはじめ君に笑顔を見せて、いつものように挨拶で迎えた。

一葉用ちゃん、じんじんちよー
今田も変わらずかわいいね」

「やあ、オーナー。相変わらず存在が邪魔だね」

お決まりのおちやらけ混じりでいて、
はいつものように苦笑い。
やや本音混じりの奉制に僕

「今日は、ドリンク何にする?」

お令やと紙おしそつを出して、葉刃せじめ箱に歸ねた。

「アイスティーがいいな……ん?
と空気が違うな。何かあつた?」
葉月ちゃん、なんか今日、ちょっと

はじめ君は、鋭すもんだと思ひ。

さすが漫画家志望だ。観察眼が冴えすぎてるなど、僕は盛大にため息をつきたくなった。

「もしかしてつ、オーナーと喧嘩したとかつ
」

ウキウキした声を発したはじめ君に、

「喧嘩なんかしないわよ… 今日もラブラーです」

葉月はやれやれと嘆息して、アイスティーの準備に取り掛かった。

「なーんだ… つまんね」

はじめ君は小さく舌打ちをして、ニッコリとした笑みを僕に向けて、

「…で？ 何があったの？」

そう言って、グラスの水を一口飲んだ。

帰り道

「アイス食べたい…。ソーダ味のアイスが、無性に食べたい…」

自転車の後ろ つまりは荷台に乗つてゐる蒼は、きつと膨れつ面
か、バテ顔かぢつちかで俺の背中をグーで殴つてきやがる…。

「やつや無理だな。こんなずぶ濡れでコンビニはおひか、商店にす
ら入る勇氣はねーよ…」

嘆息気味にそつとぶやいたけど、あつと風圧に強き弾されて俺の
声は蒼には届いてないだろうな…。

「ジュー、ぬるくなつた！ 北村つ！ あげる！」

先刻自販機で買ったペットボトルを握りしめた白くて細い蒼の腕
が、後ろからにゅつ、と右ハンドル付近へ伸ばされた。

(こやこや、この状態で、一体どうやって飲めつてんだ?)

後ろの荷物(蒼)を気遣いながら丁字のハンドルを握りしめて、
ペダルを踏み込むという作業中に、キャップの開いてないペットボ
トルを渡されても…なあ…。

そんなとんちんかんな蒼の行動に、なんだか妙な笑いが込み上げ
つつも、やんわりと「いや、飲みかけのぬるいジュースはいらない」
つて一言告げた。

そんな俺に「せつかくの人的好意を無にするとはー」と叫び、ペ
ットボトルで軽く俺の背中を叩いて「えいっ！」って声をあげた。

「 ちよつ、そんなもんで叩くなよつ！」

そう言いながらも、込み上げた笑いを堪えることができなくて、

俺は声を出して笑う始末。

蒼もそんな俺につられてクスクスと笑いだした。

まだまだ日が沈む気配のない午後4時過ぎ。

生ぬるい海風と熱い日射しを体中に浴びながら、目線を少し上向きにすると、淡く眩しい青空にそびえ立つように前方に見える大きな入道雲。

全く夏つてやつは不思議だ。

こんなにも暑くて、こんなにも眩しくて……。

そして、こんなにも心が躍る。

夏つていうだけで、何もかもがキラキラ輝いて見える。

きつとそれは、俺が今、1人きりではなく、誰かと一緒に時間を分かち合つてるからつてのもあるだろうな……。

背中で笑つてる蒼の顔は肉眼では見えないけど、別の部分の目つまり、心の目ではくつきりと鮮やかに見える。

そんな蒼を浮かべたら、否応なしに躍るように鼓動が速まった。

「 北村のお姉さんはまるでひまわりみたいな人だつたなあ……」

蒼はふふっと楽しそうに笑つてつぶやいた。

「 ひまわり……か……」

確かに。

あの筋金入りのポジティブさと言い、些細なことでも楽しく笑つて話す姉を思い浮かべたら、太陽に向かって精一杯真っ直ぐに伸びる

大輪のひまわりみたいだなって思った。

(蒼のこと…うまく話せなくて…めん…)

心の中で何となく姉に詫びたくなつた。
何だから心配性な人だから、気になつてゐるだらうな…。

でも、言えない…。
今はまだ…。

「お姉さんの彼氏…さんは…、つくしみたいな人だつた…」

蒼が発した言葉にほんの一瞬だけ思考が止まつた。

「え? ちょっと、待て。つくしつて…」

洋一さんを思い浮かべたり、ちょっとと吹き出しそうになつた。
(すみません洋一さん…)

その姿は俺より少し高め身長でやや細い体。髪は短めで控え目
な焦げ茶色。

海辺でカフフを経営してゐるのに、あまり日に当たつてなさげな白め
の肌。

トータルして年相応ではなく若干上に見えるつてか、年の割りには落ち着き過ぎてる感じがする。
姉と同じ22歳には見えないくらい、しっかりとした大人の男だな
と俺は思つ。

「……つべ……か」

つぶやいたら、妙に納得して自分に気付いた。

「つべし……嫌いじゃない……」

やうづぶやいた蒼い、

「そりゃ良かつた」

俺は笑いを噛み殺してつぶやき返した。

はじめ君…

「へー…、男性恐怖症、しかも大人限定って、変わってんなあ…」

はじめ君はアイスティーカップのストローをくるくると回しながら僕の顔をじっと見つめて、

「オーナーはどう思ひ?..」

「どう…って?..」

はじめ君の尋ねる意味が何となく理解できた僕は、自分の見解を述べることをはぐらかすよ!とはじめ君に尋ね返した。

「その葉月ちゃんの弟の彼女…蒼井ちゃんだけ? その子が男嫌いになつた理由だよ」

まるではぐらかすなと言いたげな目を僕に向けて、答えを求めるはじめ君に、

「原因を勘ぐるのは苦手です」

やんわりと笑つて黙秘の態度を取つた。

「葉月ちゃんは? ビう思つた?..」

視線を僕から葉月に切り替えて、はじめ君は再度回答を待つ。

「…よくわかんないよ…」

葉月は紙ナプキンを補充しながら、僕と同じよつともやんわりと笑つて黙秘の態度を取つた。

「よほびにひびく男にフラれたとか…。もしかしてガツコの先生にやられちゃったとか、…ああ…父親って可能性も」

「やめてよつ！はじめ君！」

それ以上言つなど謂わんばかりに声を荒げたのは、葉月だった。

「いや…、男嫌いになるつてさ、どうしても色恋沙汰とか性的なこと結びつけて思に浮かべちゃうのは仕方ないのか？」

はじめ君はやれやれと笑つてシフォンケーキをフォークでつついた。

「そんなこと堂々と思い浮かべるのは、はじめ君だけだよ！ それ」「… そういうこと、軽はずみに口に出しちゃうのは良くないよつ！」

葉月は、僕に視線を向けて「ねえ？」って同意を求めてきたけど

…。

僕は苦笑しか返すことができなかつた。

「葉月ちゃんつて、なんか時々やたら生娘みたいな反応するよね？ もしかしておたぐり、まだヤツてないとか…？」

ふへへつとしまりのない顔で笑うはじめ君を睨んで、葉月はわなわなと奮えながら、

「ご心配なくつ！ 洋二と私とは身も心も深く結ばれちゃつてしますからつー」 フンッ… つとひとつ鼻を鳴らして、

「とにかくつ！ 明日から蒼ちゃんと弟の充月が店の手伝いに入るから！ 絶対に余計なこととか聞いたりしたりしないでよねつ！」

頬を紅潮させて息を荒げた葉月を見て、はじめ君は、

「俺、葉月ちゃんの怒った顔、超好きだなあ」「

細い肩と少し長くて黒い前髪を揺らしてケラケラと笑いだした。

「はじめ君…、あまり葉月をからかわないでよ…」

僕は苦笑いではじめ君にそう一言告げた。

「別にからかつたつもりはないよ。葉月ちゃんの怒った顔が好きってのは本心だし。なんつーか、創作意欲が妙に沸くつーかね」

□元を緩めて葉月を見るはじめ君に、

「…創作意欲だか何だかそんなの知らないけど！ あの子達を傷つけるようなことしたら、お店出入り禁止にするからねっ！」

葉月は、はじめ君に人差し指を突き付けて言い放った。

「…過保護だねえ」

はじめ君は僕に視線を投げて愉快そうにつぶやいた。

「過保護で結構よ。充月は大事な家族だし、充月が初めて紹介してくれた彼女の蒼ちゃんだって、大事なんだから」

「過剰防衛して、逆に傷つけちゃうってこともあるって、覚えていたほうがいいよ」

はじめ君はやんわりと笑みを浮かべて、アイスティーを飲むと小さく息を落とした。

「心の傷つてやつは、時々人の表面上の優しさで更に酷くなる時があるからね。上つ面だけで相手を優しくいい子いい子してたら、逆

に相手にもつと深手を追わせる」とだけてあるからや……」

はじめ君は、少し寂しそうな顔でほつと笑つて僕のことを叶月

た。

「はじめ…君…？」

葉月はそんなはじめ君の愁いを帶びた顔を見つめて、不安そうな表情を浮かべてつぶやいた。

「なーんて台詞を主役に言わせられるような、爽やかな青春モノが描きたいな」

はじめ君はくくと笑つて、

「よしそろそろ休憩終わるから、波音に戻るわ。あ、オーナー、俺、紅茶のシフォンケーキが食べたい。そのうちメニューに入れてくんないかな?」

席を立つて僕に視線を向けた。

「紅茶シフォンですね。はい、検討します」

僕は、はじめ君に小さく頭を下げて笑みを返した。

「葉月ちゃん、また明日ね」

膨れつ面でティーセットのチケットを切り、レジを打ち込む葉月に手をひらひらと振り、はじめ君は仕事に戻つていった。

「はじめ君って本当にわけわかんない人つ」

カウンターのグラスとケーキのプレートを僕に差しだして、口を

尖らせた葉月に、

「まあ……ね……」

と相づちを打ちはしたものの、

(確かに一見わけわからぬけど、眞つひるいとは的を獲てるかも
しないな……)

はじめ君の寂しげな笑みを思い出したり、何となぐだかぎ、そう
思った。

おじなーのやつ

平坦な海沿いの旧道を家路に向かい自転車を走らせる。

鬱蒼とした草が茂る空き地を越えた小さな交差点を右に曲がり、数分走ると道の両脇に住宅街が広がる。その中に蒼の住む家がある。

蒼の家は元々この界隈の大地主で、この住宅街の土地も全て彼女の祖父のものだつたらしく。

周りの民家とはちょっと違つて、広い敷地を囲う黒い木造の塀がやたらデカくて、ちょっと格式の高そうな威圧感を感じる、立派な門構えの日本家屋が蒼の暮らす家だ。

塀から門までの距離に自転車がさしかかると、蒼は「とめて…」と、弱々しい声で俺のシャツの小脇を引っ張る。

左ブレーキをゆっくりと握り、自転車を停めると、

蒼はのそりと重い足取りで荷台から降りて、俯いて立ち止まつてしまつた。

「…大丈夫だよ…」

蒼は俯いたまま作つたよう明るい声を発したけど、

「…んなわけねーだろ…」 明らかに震えた声や、震えを懸命に止めるために固く握りしめられた両手を見たら、どんな鈍感なバカでもわかるだろ…。

蒼の頭をそつと胸に引き寄せると、

「…北村あ…、シャツが磯くさい」

胸の中で微かに笑んだ。そんな蒼の声に、胸が軋んで、言葉が返せなくなってしまう、情けないな…。

「北村あ…」

蒼は俯いたまま再度俺の名前をつぶやいた。

「…がんばれって言つて…」

震える両手で、俺のシャツを掴み、

「…お願い…。がんばれって言つて…」

弱々しくも強い言葉。

それは、まるで自分を動かすまじないでも求めてるような、そんな切願を込めた言葉に感じた。

「がんばれ」

本当は、蒼にこんな言葉はかけたくない。

蒼はこんなに頑張つて、自分の苦しい気持ちと戦つてゐるじゃないか…。

「がんばれ！」

あんな事件があつて、家族から家の恥曝しだと疎外され、孤立する日々を続けて一年近く…。

悪いのは蒼じゃなく、全てアイツなのに…！

蒼に付き纏い、苦しめた挙げ句、当た付けのよつと逝つてしまつたあの男の顔を思い出したら、身体中の血液が沸騰する感覚に襲われる。

「がんばれ！」

俺には蒼の全てを守る力なんてない、中途半端で弱いガキだ。こうしてずっと辛い気持ちを背負つ蒼に、こんな陳腐な言葉しか『えでやれない。悔しいよな…本当に。』

胸の中に包み込んだ、細く小さな身体は、懸念で震えを止め、呼吸を整えようと、深く息を吸い込み、ゆっくりと吐くを数回繰り返している。

「がんばれ」

蒼の頭に頬を寄せて、込み上げる胸の苦しさを堪えながら、俺はまじないのよに、何度も何度も繰り返す。

そうするうちに、蒼の呼吸は落ち着きを取り戻し、手や身体の震えも徐々に治まっていく。

「がんばるよ…」

小さなつぶやきに、力が宿った気がした。

「がんばるよ。もつ逃げないって決めたんだから

顔を上げた蒼の瞳は少し赤くなつて潤んでた。

「明日から、新しい」とが始まる。北村と一緒に始める、始めたい。だから、がんばりたい

小さな光が宿つたかのように、蒼の色素の少し薄い茶色い瞳は真っ直ぐに俺の目を捕えた。

「ああ、一緒に頑張りつ」

楽しいことばかりではないだろうけど、少しでも蒼が笑顔で前に進めるようにと願いを込めて、俺は小さく笑みを贈った。

「よし、もう大丈夫」

蒼はまだ少しづきいちなさは残れど、笑みを浮かべて俺の胸から離れた。

「大丈夫っ！ 歩けるっ！」

2、3、軽く足踏みをした後、ゆっくりと歩き出した。俺はゆっくりと自転車をひきながら蒼の少し後ろを歩く。

「……」

蒼が急につぶやくように歌つたのは、アイビーで流れてた姉の好きなバンドのポップなラブソングだった。

幼な子のような蒼のソプラノにつられるように、俺も自然と歌を口ずせる。

門まであと数メートル。

一人でいられるその短い距離を惜しむように、しかし挑むように確実に、蒼は歌いながらも踏みしめるように門を手探して歩いた。

そんな蒼の小さな背中を見つめて、俺はやっぱり

『頑張れ』って言葉を心の中で唱えてた。

CLOSE～1日終わつ～

まだ日暮れには程遠い、陽光が明るくまぶしい夏の午後5時。

僕は厨房を片付け終えて、暖かいレモンティーを入れ、看板を「OPEN」から「CLOSE」へと替える為に表に出た葉月を待つ。

カウベルが鳴り、

「んん～っ 今日も忙しい一日だつたあ～っ 「

と、葉月は身体を伸ばしてホッと息を抜いた。

「今日も1日お疲れ様でした」

僕はカウンターにレモンティーを出して葉月に小さく頭を下げた。

「オーナー、お疲れ様でした」

葉月も小さく頭を下げて、満足そうな笑みを浮かべた。

「今日は色々あつてちよつと疲れたろ?」

僕は葉月の隣に座り小さく息をついた。

「うん、ちょっとだけね」

葉月はレモンティーを一口、ゆっくりと飲んで口元を緩ませて小さな息をついた。

「明日から、二人が仕事を覚えるまではしばらく忙しくなるな…」
蒼ちゃんの仏頂面を思い出すと、否応なしに苦笑いが込み上げる。

「厨房に人が入るなんて、何だか不思議だね」

葉月は感慨深い顔で厨房を見つめてつぶやいた。

「なんか、緊張するな…。正直僕は人に何かを教えるのは得意じゃないからね」

厨房に皿を置ると、何だかため息が出た。

「大丈夫よ。絶対洋一なら蒼ちゃんとつまくやれるよ」

葉月の視線は厨房から僕に真っ直ぐに向けられていた。

「…でも、あまり仲良くなつたら…やだなあ…」

葉月はぽつりと言い終えた後、はつとして「ごめん…今の無し…」と苦笑いを浮かべると、照れ隠しをするように再度ソーサーを口元へと運んだ。

「正直ちょっとジーラシー…。だって、厨房は洋一だけの場所で、調理は私が触れることのできない領域で…。あの場所に誰かが入つて一緒に仕事をするなんて、今まで考えてもみなかつたから…」

葉月は少しあびしそうな顔で小さく笑みを浮かべた。

「おかしいよね？ 私が蒼ちゃんに厨房に入ればって言つたのにね
…」

せつぶやき、葉月は頭を僕の肩にそつと寄せた。

「ここには僕と葉月の場所がきちんとあって、その互いの場所を尊重しあうことができるから、お客様も安心して足を運んでくれてるって僕は思つてるよ」

葉月にしかできること。そして、僕にしかできること。
そのどちらかのバランスが偏つてしまえば、きっと店は店として
成り立ちまじないと僕は思つてゐる。

「僕は葉月がフロアにいてくれるお陰で、厨房で精一杯頑張ること
ができるよ。本当にありがとつ」

僕は葉月に笑みを向けた。

「それからさ、僕は、葉月が店の厨房ではなく、うちの台所に立つ
て、夕飯を作ってくれて、それを一緒に食べることができるほうが、
とても幸せで尊いと思つてゐるよ」

改めてこうこうとを言つた、かなり照れ臭いけど、ちゃんと
伝えたいと思つた。

「今日の夕飯は何にしようか?」

葉月は嬉しそうに僕に笑みを向ける。

「そうだなあ…。今日も暑かつたから、ちよつとおひばりしたもの
がいいかな?」

僕の注文に、数秒考えた葉月は、

「よしッ 今日はサラダ冷しゃぶにしよう」

椅子から立ち上がり、

「さつ、洋一、買い物買ひ物つ 今日は私が車の運転するから、
お店の戸締まりようしへつ

椅子に腰掛けた僕の背中に、ギュッときしがみつき、短く頬を寄せる
と、軽やかな足取りで店の裏口から駐車場へと出ていった。

「…本当、疲れ知らずだよな」

葉月の柔らかな温もりが残る左頬をさすりながら、こみあげる氣恥ずかしさと温かさで思わず口元が緩む。

「よし、戸締まり、戸締まり」

僕も立ち上がり、店の入り口の鍵を締めて、裏口へと歩いた。

鍵を締めると、駐車場にはエンジンのかかった黒い軽自動車。運転席には葉月の笑顔。

僕らの日常の日課となってる閉店後の夕飯の買い物。葉月と一緒に暮らし始めて早いものでもう4ヶ月になる。

「おつかれさん…」

ちゃんと、葉月に大事な言葉を伝えたい…。

「よしつ、夏が終わつたら…」

密かに決意し、両拳を握る。

「がんばろう」

小さく自分に氣合いを入れて、僕は葉月が待つ車へと小走りした。

早朝、スタートライン

いつもなら、携帯のアラームのしつこいスヌーズ機能を幾度となく手探りで止める朝。

でも今田はそんなしつこいアラームよりも早く田が覚めた。携帯を開くと午前5時を少し過ぎた時間。起き抜けの氣だるやよりも、心がそわそわとするほうが勝り、俺はベッドから起きて、真横のカーテンが開け放しの窓を見つめた。

夏の田の出は中々早いもんだな…。外はすでにかなりの明るさだ。今日もいい天気だ。きっとこの部屋を一歩出たら、否応なしに暑さが体にまとわりついてくるだろうな…。

ベッドから出で、とりあえず冷房で渴いた喉を潤す為に1階の台所へ向かう。部屋のドアを開けたら、案の定、むわっとする暑さに包まれて思わず「暑い…」と言葉が零れた。

階段を降りて1階へ降りる。当たり前だけど誰も起きてない静かなリビングの奥には目指す台所。

何となく物音をたてる事をためらい、なるべく足音を消すように普段よりそつと歩く自分に小さな苦笑が沸いてくる。

冷蔵庫にたどり着き、そつとそれを開けて、飲みかけのペットボトルのスポーツドリンクを取り出し、リビングへ歩きながら喉に流し込む。

体内が冷やされた感じで暑さがほんのり和らぎ、ソファーに座つ

てテレビのリモコンを押し電源を入れる。

早朝だからどのチャンネルもろくな番組がやってない…。

何となくため息が出て、リモコンをテレビに向けて電源をきつた。

「とりあえずシャワー浴びるか…」

スポーツドリンクを全て飲み干して息をつき、俺は着替えを取りに自室へと戻った。

ドアを開けると別天地。冷房の効いた心地よい部屋。一旦入ってしまえばしばらくな出たく無い…。時間もまだ早いから今から一度寝もありかな？

普段ならそんな誘惑に負けそうに、いや絶対負けるけど、今日という日は普段とはちょっと違つかうからそれは無しだ。

ベッドの上に無造作に置かれた黒いふたつ折りの携帯に目を遣ると、サブディスプレイの青いライトが点滅してる。メールが飛んできてる。

「ひんな朝っぱらかい…」

一番に蒼の顔が浮かんだ。何かあつたんだろうか…。携帯を開き、決定ボタンを押すと、やっぱり蒼だ。

「は…？」

文面を読んで、思わず素つ頓狂な声が漏れた。

『『どっちが先に店につくか競争だー！ 私が勝つたらアイスをおこる』』

「馬鹿やろ…」

笑いを噛み殺しつつメールを返信する。

『負けるのはまちがいなくお 前 だ』

蒼の悔しげな膨れつ面を思い浮かべて送信すると、数秒後にメールではなく通話着信のメロディーが鳴る。

「お前…何だよ、こんな朝早くから」『北村のばかばかあああっ！…』

電話の向こうで蒼が喚くから、思わず携帯から少し耳を離した。

『私が負けたら、北村がアイスをおこるんだからなっ……!』

「はああ？ 勝ったほうつかわき」『

『うるさいーーー！ 北村が勝つたらなんて書いてないっ！ 私が勝つたらって書いたじゃないかっ！』

「ちょっと待て、それじゃあお前が勝つても負けても俺はもれなくアイスをおこらされるつうことか！」

全くもって笑える理不尽さだと、笑いを噛み殺しつつ、蒼の声を待つけど、電話の向こう側は急に無音になつた。

「蒼…？」

名前を呼ぶと、

『…北村あ…』

声のトーンが急に下がった蒼の声。

「…どうした…？ やっぱり不安か…？」

『……ひょっとだけ……ね……』

空元氣を脱いだ本当の蒼の声に、俺は小さく息をついた。

「昨日はちやんと寝れたのか？」

そつと尋ねると、

『……寒はあまり眠れなかつた……』

申し訳なさげな声が耳の奥を小さく揺らす。

『私……いつぱい迷惑かけるよ……そつと……大失敗を……』

蒼の声はどんどん萎れていく。

「はじめから何でもうまくやれる奴なんていないし、もし迷惑だと
思つたら、昨日きつぱり断られてるだろ？」

俺は蒼をなるべく安心させてやりたくて、穏やかな声でゆづくつ
と語りかけた。

「洋一さんと俺の姉ちゃんを信じる。2人は絶対に蒼の味方だから。
蒼なりに一生懸命やれば、誰もお前を責めたりしないから」

そう告げるけど蒼は、電話の向こう側で黙りこんだままだ。

「俺もちやんと傍にいるから」

少し声を強めて、言葉に気持ちを乗せる。

『アイス……買ってくれるか？』

「うつしーとつぶやく蒼に、

「7時15分に、コンビニでソーダ味のアイス買って待ってる。遅れたら食つけまづけどな」

俺は笑みを含めて蒼にそう告げた。

『そつちこなー、一秒でも遅れたら、アイス2本だぞー!』

まるで自分に気合いを入れるかのように、蒼は声を張り上げた。

「おう、俺が遅れたら何本でも買つてやる」

鼻を鳴らしてやつたら、

『よしつー、絶対北村よつ早くコンビニに着いてやるからなつー!』

蒼はふんっと小さく息を吐き、

『ありがとう! 北村つ!』

大声で叫ばれた後、電話が切れた。

「つ…耳、いてーし」

つぶやいたら、安堵の息が落ちた。

携帯を閉じてベッドに放り投げ、

「うつしー 頑張るぞ!」

何となく気合いを入れて、俺は早足で風呂場へ向かった。

1日が始まつ

「あ～っ！ 何だか緊張してきちゃつた！」

店に向かう午前6時半過ぎの車内。助手席の葉月は何だかそわそわと落ち着かない様子で、

「あの子、寝起き悪いからなあ……。ちゃんと起きたかなあ……。電話してみようかなあ……」

携帯を見つめて、つぶやいてる姿をリレー越しにチラリと見て、僕は小さく苦笑を浮かべた。

「でもでも……」

携帯を開き、口を尖らせ、

「過保護過ぎるかなあ……」

葉月のつぶやきに、僕は堪えきれずに吹き出してしまった。

「やつぱりはじめ相に言われた事、気にしてたのか」

昨日カフェではじめ君啖呵を切ったわりには……。

葉月は結構言われたことを気にするタイプだからな。

「べつ、別に気にしてないわよ～う……」

ほんのり顔を上氣任せ、携帯を閉じて小さく鼻を鳴らすけび、どうやら図星のようだ。

「充月君は大丈夫だと思うよ。责任感は強そうだし」

「……责任感なんて強くないわよ……。あの子は昔からマイペースで

時間にルーズで…。蒼ちゃんに迷惑かけてなければいいけど…」

再度携帯を開き、ディスプレイを見つめてため息を落とした。

「…僕はどひらかとひつと、蒼ちゃんのほつが心配だよ」

昨日見た感じ、17歳にしてはひょっと思考や態度が幼いよつて
思えたし、あまり人と会話をする事も好きではないようだし…。
若干デジッ娘の匂いもしたな…。今日はどんな手伝ごをさせるべ
きか正直悩むところだ。

「え？ 蒼ちゃんは大丈夫だと思つわよ」

葉月は僕を見てにつこりと笑い、

「彼女は中々デキル感じがするつ。能ある鷹みたいな

「…能ある…鷹…ねえ…。そう言い切れる根拠は？」

最早苦笑いしか浮かんでこない僕に、

「根拠なんてないわよ。ただの女の勘つ

そう楽しげにそう言い放つ葉月。

「ははは…」

(…その勘はあまり期待できそつにないな…)

僕はやんわりと口元を歪めて小さく息を落とした。

旧道の左手に縦に広がる、僕が小さい頃から変わらない海は、早朝の淡い陽光に照らされて水平線がほんのりと光を含んでキラキラ
とまぶしい。

左側助手席の葉月をリラバー越しにチラリと見ると、唇をきゅっと

結んで海を見つめていた。

「あつと大丈夫…。蒼ちゃんは、あつと元気に笑えるようになる…」

まるで自分に言い聞かせるかのように眩べ葉月の言葉を耳にして、
僕はやれやれと息を落とし、

「葉月、『気負いし過ぎちゃだよ…』」

一言声をかけた。

「…氣負つちゃつてるかなあ？」

視線を僕に向けてひとつ小さく笑うと、

「…頭ではダメだってわかつてんだけど…」

ため息をついて、

「はじめ君の言つた言葉が、耳から離れないんだよね…」

ぱつりと呟いた。

「心の傷つて、時々人の表面上の優しさで更に酷くなる時があるつ
て…。何だかあの言葉が胸に引っ掛かっちゃつて…」

複雑そうな顔色で、葉月は再度ため息を落とし、

「…本音せりゆつと怖い。蒼ちゃんの」と、まだわからないで
しょへ私、いつ、何時地雷を踏んでしまつか…どうしてか考へちゃ
うよ…」

ミハリ一越しに不安そうな葉月と視線が合い、僕は、「考え過ぎて慎重に接するよりも、普段通りの葉月でいればいいと僕は思うよ」

左手で葉月の頭をそっと撫でた。

「きっとそれが蒼ちゃんにとって一番いい事だと思つ」

人に過剰に気を遣われるつて事は、心に荷物を背負つてる時ほど余計に辛くなるつて僕は知つてる。

高校に入学して間もなく、母を突然亡くした15のあの日、周りの大人や友人にかけられ続けた過剰な気遣いの言葉や態度は、僕にとっては重荷以外の何物でもなかつた事を思い出す。

心配されれば、周囲に心配ばかりをかけてる自分が情けない人間だつて酷く落ち込んだし、過剰に親切にされれば「人の苦労なんて何も知らないくせにこいつ、ただの自己満足の偽善者だな…」と心の中で毒づいた事だつてある。

そんな僕の歪みを正してくれたのは、まだ、ただのクラスメイトで、たまたま隣の席になつた葉月だつた。

驚くほど前向きで明るい彼女は、迷惑そうな僕の空気なんてとことん無視して、グイグイと僕の心に入ってきた。

若干激しい喜怒哀楽の表情に、良いことも悪いことも気遣いなんて無しのストレートな言葉。

そして、思わず目を細めたくなるような、まぶしい笑顔。

葉月を好きになる事に、時間なんてさほどいらなかつたな…。

「私は私のまま…か。…うん、そうだ、そうだよねっ」

葉月は俯き加減の顔を上げて、僕を見つめてキュッと口角をあげ、

「洋」「がそつ語つてくれるなら、間違いないつ」

僕の肩にしなだれかかり、へへつと笑つた。

「…葉月…運転中」

僕はひとつ咳払いをして葉月を瞪める。

「やだ…照れちやつて、かわい〜」

おどけた声色で、ケラケラと笑い声をあげられると、否応なしに氣恥ずかしさが込み上げてくる。

「…はじめないでください」

僕は上気する顔の熱さをいまかすよつに苦笑にして呟いた。そんな僕を見て、そりゃ元楽しそうに笑う葉月を横田で眺めながら、小さく安堵する。

緩やかな景色から、まだ賑やかさのない静かな朝の観光町にしきかかる。

車内の時計は午前7時少し前。

店まで後数メートルのところにせしかかると、

「あれ? ?

葉月は店を指さして驚き混じりの声をあげた。

「ははは、えりあらこらない心配だったみたいだな

僕も思わず笑い声をあげてしまった。

店の前の道路の向かいには、低い防波堤。

その上に腰を下ろして僕らの到着を待っているだろう一人の姿。

「出勤時間よりも1時間も早く到着なんて…」

葉月は感慨深げな、しかし柔らかな笑顔で呟いた後、パワーウィンドーのボタンを押して窓を開けて、

「おっはよ～っ！　つてか、二人共、早過ぎ～っ！」

静かな朝の町に、元気な葉月の声が響いた。

姉と仕事

「つたく…、早く着き過ぎだつて。張り切り過ぎると体がもたないわよつ」

姉は楽しげに俺の背中を叩いてケラケラと笑つと、アイボリーのかつらHプロロンを差し出した。

「……」

Hプロロンを無言で受け取り、半笑いして横田でジトリと蒼を見る。（7時15分にコンビニつて言つたはずなのに、6時過ぎにはもうコンビニに着いて、早く来いとか催促の電話入れてきやがつて…）おまけにマジでアイス2本とか…食つたしな。

俺の視線に気付いた蒼は、（なんだよ…私は向も悪くないんだからな）とでも言いたげなジト目を返してきた。

ほつ…おもしれー。
後で覚えとけ。

「蒼ちゃんには、はこ、これ」

蒼には洋一やんと同じ、少し丈の長い黒いHプロロンを差し出して渡すと、

「今日から8月末まで、宜しくお願ひします」

俺達に深々と頭を下げた。そんな姉にはつとして、

「あ…」

姉弟関係なのににも関わらず、自然と敬語で俺も姉に深々と頭を下げる。

隣でエプロンを胸に抱き、数秒呆気に捕われる蒼だつたけど、少し顔を赤らめて「宜しく…お願いします」とつぶやきながら頭をペコリと下げる。

「蒼ちゃん、今田はいい格好だね しつかり働けそうな服装。合格です」

シンプルな濃紺のTシャツにゅつたりとしたジーパンに黒いスニーカーの蒼を見つめて、姉は満足げに笑顔を向けた。
そんな姉の笑顔に、蒼は無言だけど照れくさそうに、だけど嬉しそうに小さな笑みを浮かべた。

厨房からフロアへと顔を出した洋一さんは、

「じゃあ、早速だけど、葉月は充月君にフロア仕事を教えながら。蒼ちゃんは厨房へお願いします」

蒼の顔が緊張した表情に変わる。口をギュッとむすんで、両手を握る。

「大丈夫よ。私達を信じて」

姉は蒼の両肩に手を乗せて「リラ～ックス」と笑顔を放つた。

蒼は俺にほんの少し不安混じりな視線を向けたけど、（大丈夫だ、頑張ろう）って気持ちを込めて小さく笑うと、それに気付いてくれたのか、蒼は小さく頷き、ひとつ深呼吸をして、フロアに背を向け

た。

「がんばれ……」

蒼の背中を見つめて少しふりふやいたり、

「あんたも頑張りなやこよ。蒼ちゃんに負けなことうにね～

俺を見つめてニヤニヤと笑う姉に、恥恥なしに恥恥ずかしさが込み上げて、

「んなことわかつてゐる」

とつあえず、トイと視線を反らした。

「じゃあ、フロアの清掃を始めようか」

姉は元気よく「お~っ」と右手をあげて、フロア奥の手洗い場へと歩き出した。

(全く…相変わらず)の人は朝からテンションが高いよな…)

姉の背中を見つめたら、小さなため息がでた。

(まあ…、元気ってことは、何事にも順調だつてことだよな)
ため息とは言つものの、安堵の気持ちが混じる、悪いため息ではなくだけじ。

「掃除用具はここにあるからね」

姉はトイの右手奥にある縦長の扉を開けて、一字型のホウキやモップを取出して、

「まず、朝一番にすることは店の掃除よ。お客様を気持ち良く迎える態に、フロアトイはこつでも綺麗にしつかなくね~」

姉は俺にモップとバケツを渡して、ニカッと笑う。

「トイレ掃除をする時は、トイレ手前のドアを開けたら、そこに掃除道具や備品が入ってるからね」

姉は説明しながら、店の出入口のドアを開けて、マットを花壇の煉瓦の囲いに干すように置いた。

「掃除が終わつたら、表の花壇と店内の観葉植物に水やりをして、レジを開けて、入り口のホワイトボードに今日のメニューを書いて、開店準備は終了よ」

ホウキでフロアを丁寧に掃きながら、大まかな仕事の流れを説明する。

「充月、掃き終えた場所からモップかけて」

姉はそう俺に告げると、店内に流れる歌を鼻歌混じりで歌いながら、慣れた手つきで作業を進めていく。

フロアを掃き終えたら、姉は雑巾で全席の椅子を拭き、最後にダスタークロスでテーブルを丁寧に拭いて、メニューや塩の入れ物、爪楊枝等をテキパキと整えていく。

俺がモップかける間に、フロアの仕事は殆ど終わってしまった。…。

「モップかけが終わつたら、トイレ掃除ね。とりあえず慣れて貰う為に私は見てることにするから」

姉はそう言って、自分が率先して動くではなく、俺の作業を見る

側に回った。

モップをかけ終えて、掃除道具を片付けた後トイレ掃除に取り掛かる。

その間に、掃除に対する細部の注意を受けながら、何とか掃除を終えた。

「ふう……」

フロア内は冷房が効いて涼しいけど、体を動かせばぱり少し汗ばむ。

でも、隣で鼻歌混じりでホワイトボードに今日のランチメニューを書き込んてる姉は、あれだけ体を動かしてたにも関わらず、暑さなんて全く感じてないみたいに涼しげな顔してる。
(流石…伊達に5年とか続けるわけじやないよな)
ちょっとだけ姉を尊敬した。ちょっとだけな…。

(つーか、蒼は大丈夫かな…)

厨房を横目でチラリと見ると、カウンター側に蒼の俯き加減の頭が見えた。

洋一さんは、厨房の奥で、蒼に背を向けて作業してた。

何をやつてんのかはこそこからは見えないけど、その顔はかなり真剣で。

(がんばれよ…)

思わず心の中でつぶやいた。

「かわいい彼女に見惚れてないで、花壇に水やりつー！」

「！－！」

後ろから姉にコツンと頭を叩かれて体が驚き跳ねる。姉に顔を向けたら、案の定すづげー二ヤニヤしてた…。

「…」

くそつ、なんか恥ずかしい…。

俺は熱くなる顔をじまかしつつ、姉に軽くジト目を向けた後、早歩きで店の表に出た。

厨房内

「それでは、今日から宜しくお願ひします」

僕は蒼ちゃんにひとつ礼をする。

「よ……宜しくお願ひします……」

蒼ちゃんは、そんな僕に向かい頭を下げてつぶやいた。相変わらずの『挑む田力』を込めて……見られてる。

「蒼ちゃんは、料理はした事あるかな？」

僕はとりあえず笑みを返し、彼女がどれくらいのことが出来るかをやんわりと探ることから始めようと思い、質問をした。

「料理は……晩ご飯を毎日作っています……」

蒼ちゃんは、急に気持ちが失速するかのように僕から視線を外して小さくつぶやいた。

（……触れてはまずかつたかな）

一瞬そう感じたけど、敢えて空気は読まないことにする。余計な詮索や気遣いはぎこちなさと無駄な距離を生むだけだから。

「へえー、毎日夕飯を？ それは偉いね！ 得意な料理つてあるかな？」

彼女が普段どんなものを作っているのかも尋ねてみる。

実は申し訳なくも、僕が抱く彼女の印象は、頑張つて目玉焼きならイケるかなってイメージだったから、かなり驚いたってのも本音だ。

「…和食のほうが得意です」

蒼ちゃんからの返答はそれだけだった。でも瞳が少しだけ大きくなり、顔はほんのりと嬉しそうだ。

(和食が得意なら…基本的な事は大丈夫かもな)

「和食が得意なんて、凄いね。…よし、それじゃ、まずはモーニングの準備をしようか」

僕は冷蔵庫を開けて、卵を15個ボールに取出し、

「ゆで卵はこの鍋を使ってね」

ガス台の下に並べてある中位の片手鍋を指差した。

「ガスレンジは、家庭用とちょっと違つから、安全の為に使い方をしつかり覚えてね」

僕は彼女にガスレンジの使い方を教えた後、

「それから

冷蔵庫を閉めると、扉に貼りつけてあるマグネットタイプのデジタルタイマーを指差して、

「ゆで卵の時間はガスに鍋をかけてから20分です。卵のお湯は沸騰したらすぐにガスを中火にしてください。茹で卵がヒビたり、割れないようにな」

そう説明すると、蒼ちゃんは僕に再度目力を向けて「はい」と頷いた。

「では、ゆで卵作りをお願いします。茹であがつたら、ここの鍋を入れて、水で充分冷やしてね」

中央の調理台の端に備え付けられてるシンクを指差した。

「僕は今からアイスコーヒーとランチの仕込みをするから、ゆで卵を作りながら、仕込みの大体の流れを見てください。それでは、始めましょう」

僕の開始の声を聞き、蒼ちゃんはひとつ、しつかりと頷いて、ゆで卵作りに取り掛かった。

僕はいつものようにステンレス製のポットにお湯を沸かして、機械でアイスコーヒー用の豆を挽き、中型の寸胴にセツトした大きめの麻の袋に挽いた豆を入れて、コーヒーをドリップして水を張ったカウンター裏のシンクで寸胴を冷やす。
それからランチ用のミニサラダに取り掛かる。

冷蔵庫からキャベツを取り出し、中央調理台にまな板とステンレス製の網目状の水切り用ボールとボールを重ね置き、牛刀でキャベツを千切りにしていく。

切り終えたキャベツをボールに入れて水にさらしておき、その間にきゅうりやトマトを切り、プラスチック製のタッパーに詰めた。

最後に飾りとして使用するホールコーンやパセリを小さいステンレス製の四角い容器に詰めてサラダの仕込みは終了。

キャベツを水でさらし終える頃合いに、ゆで卵のタイマーが鳴る。
蒼ちゃんは、ガスレンジの火をしっかりと消して、シンクに鍋を入れて水を流し入れた。

僕は仕込みを済ませたサラダの材料を冷蔵庫にしまい、ゆで卵の出来具合を確認する為にシンクを覗いて、
「うん、とても綺麗に出来てるね。合格です」

笑みを向けると、蒼ちゃんは安堵の色をのぞかせて、小さくほつと息を落とした。

「じゃあ次は、ホットコーヒーの準備だ」

僕は、蒼ちゃんと一緒に倉庫へ行き、

「これがアイス用の豆で、こいつちがホット用の豆だよ
ホットコーヒー用の豆を機械にかけて挽き、コーヒーメーカーにセットする。

「朝の仕事は大体こんな感じだよ。後は開店したらモーニングのお客様をさばきながら、ランチの段取りをするんだよ」

大まかに説明をしながら、アイスコーヒーの冷め具合を見る。うん、いい具合だ。

「アイスコーヒーは、このアイス用ポットに移し替えて、冷蔵庫に入れておくんだ」

僕はあらかじめ用意しておいた2つのステンレスポットにアイスコーヒーを移し替えて、

「蒼ちゃんは、コーヒーは苦手なんだよね？」

尋ねてみた。

(昨日来た時はアイスティーだったからな…)

「…苦い飲み物は苦手です…」

蒼ちゃんは仏頂面でつぶやいた。

「あ、そうだ。ガムシロとミルクを出さなきや」

僕はアイスコーヒー用の冷蔵庫からガムシロップとミルクの入った袋を取り出し、

「このプラスチックケースにガムシロとミルクを補充してください」

カウンター裏の調理台の上を指差して、彼女に袋を差し出した。

「……」

蒼ちゃんは、息を詰めるように、無言で恐る恐る僕に手を伸ばして、それらを受け取ると、深く息を吐いて安堵の色を見せた。

そして、僕に向むりと背中を向けて、ケースに補充を始めた。

(中々打ち解けた会話ができないな……。まあ、仕方ないな……焦らずいこう)

僕は苦笑いして、冷蔵庫からスープストックを取り出し、ティミグラスソース作りに取り掛かった。

回想

「あ……」

花壇に水をやる為に店から表に出た矢先に、照りつける日射しと湿り氣を帯びた熱い海風に包まれて、思わず夏のお約束の声が漏れた。

店の横にある水道の蛇口をひねり、取り付けられたシャワータイプのノズル付きホースを伸ばして、花壇に植えられたアイビーに水をまき、湿った土の匂いを感じると心なしか涼しくなるような。いや、多分気のせいだな……。容赦なく直射日光が当たる背中が暑い。

渴いた葉が潤うかのように、褪せたような薄い緑色が水滴を纏い、濃い緑へと変わる様子眺めながら、厨房内で真剣な顔をして何かしらの作業をしていた蒼を思い出す。

(あいつがあんなに真剣な顔を見せるなんて、どれだけぶりだらう……)

蒼と初めて言葉を交わした、去年のあの日をふと思い出した。

「……出会こは最悪だつたな……うん……」

歩道橋の上で、ぼんやりと下を見つめてたあいつは、今にもそこから飛び降りてしまいそうな……、そんな重い空気に満ちてた。

進藤蒼は、隣のクラスの訳ありな女子だった。

高校に入学して初めての夏休みの学校内で起きたある事件のせい
で。

事件の数時間前に、学校の裏サイトに写真付き、名指しでこう書
き込みされてたらしい。

『進藤蒼は、未来永劫僕のものだ』

そんな文章から始まり、2人がどれだけ濃密な関係だったかが、
事細かく書き綴られていたんだとか。

そして、最後に

『僕は天国から君を見守っています。たとえ君が僕を裏切ったとし
ても、僕はやっぱり君を愛してるから』
そんな書き込みを遺して、ひとりの教師が夏休みの校内であらうの
人生に終止符を打つた。

サイトの書き込みは、夏休みでパソコン利用者が多いこともあつ
て、瞬く間に生徒に話が広がつた。

本当の理由や、加害者扱いされた、被害者の蒼を置き去りにして
……。

俺には蒼の訳あり事情なんて大して興味のない事だつた。でも、
学校で生活をしてれば嫌でも耳に入つてくる蒼に対しての冷ややか
な言葉や噂話に、どこかしら苛立ちを感じたのは否定しない。

『よく学校に来れるよな』

『あたしなら、あんな事があつたら絶対学校辞めぬし』

『どうゆう神経してんだか』

『いや、ぶつけやけ神経とかないんじゃね?』

『なんか、気持ち悪いよね…』

『関わんないほうがいいって。呪われるよ』

廊下を歩く蒼を遠田で見ては、嘲笑を交えた蔑みの言葉をあからさまに、平然と吐く輩。

聞こえてるはずなのに、無反応、無表情な蒼を見かけると、言い表し様のない感情が足の爪先から心臓へと登つてくるような感覚に陥った。

あの日、俺は歩道橋の上にぼんやりと立つてた蒼の肩を掴んで叫んだ。

「何やつてんだよ!」

つて。

蒼は俺の手を肩を回すように退けて、

「景色を眺めてるだけなのに意味わかんない…」

俺に顔や体を向けないまま、抑揚のない、無感情な言葉をつぶやいた。

「は? 景色を眺めてた? 嘘つけ! お前、今絶対

「死ぬ気があるなら、もつと早くにあの世にいってる」

蒼は俺の言葉を遮るように冷たい一言を放った。そんな蒼の言葉に、俺は思わず黙り込んでしまった。

蒼はやや下に落とした視線を上げて、少し遠くに見える灰色の海を見つめて、

「ひとりがいい…。だから邪魔しないで」

田に少しかかる長さの黒くて真っ直ぐな前髪が、風で後ろにさらりと流れる。丸い額が露になり、漆黒に濡れる睫毛と、色素が少し薄い瞳がはっきりと見えた。

その瞳は冷たいガラス玉みたいだった。

「同情されるなら、蔑まれたほうがずっと楽」

蒼は抑揚のない声でぼつぼつとつぶやいた。

「同情なんてしてねーよ」 図星をされたて、思わず虚勢を張った俺に、蒼の瞳が向けられて、

「何も知らないせに。知ったがぶつして近づいてくる偽善者って大嫌い」

冷たい言葉と反して、蒼の瞳は、驚くくらい強くて、真っ直ぐで真剣で…。

あの時の事を思い出したら、否応なしに苦笑が込み上がる。けど、それと反して、今、少しずつ笑顔でいる蒼を思い浮かべて安堵感に

包まれる。

水をやりながら、出窓から店内のカウンター奥をチラリと覗き見ると、蒼は洋一さんの隣で何かをじっと見つめてる。

(…「こんな短時間でかなり距離が縮んでる…）

さすがはつくしの人。

洋一さんは柔かな性質は、まさに心地よい春の陽気みたいだからな…。

嬉しさで笑いが小さく込み上げた。その時、

「おっ、葉月ちゃんの弟っ…」

背中から急に浴びせられた男の声に、思わず体が跳ねた。

「……」

無言で振り向くと、

「よつ」「よみ

つと軽く手をあげて涼しげな笑みを浮かべる、黒髪の男の人人が立つてた。

厨房内2

「よし、これで一通りの仕込みは終わりです。後は開店を待つだけだよ」

僕は蒼ちゃんに小走りで笑みを送った。

「…はー」「…はー」

俯き加減で安堵の息をつき、ほんの少しだけ緊張した表情を緩ませて、蒼ちゃんはぽつりとつぶやいた。

「初日だから、きっとわからない」とだらけだと思つたが、気が付いたことは何でも遠慮なく聞いてね

そんな僕の声掛けに、

「…メモ…を取りたいのですが…」

蒼ちゃんはジーパンの後ろポケットから小さなメモ帳を取出して、恐る恐る僕にかざした。

「残念だナビ! 廚房内のメモは禁止です

笑みを絶やさず、「聞かせてみると、

「…メモしなやや、忘れちやう…」

口を少し尖らせ、蒼ちゃんに上田遣いで僕に田力をむけるナビ、

「厨房の仕事は頭ではなく、体で覚えることが大事なんだよ。段取りや調理にはマニアアルはないから、体にたたき込まなきゃいけない」とばかりだからね

僕は、大事なことをしつかりと伝える為に真顔で真っ直ぐに蒼ちゃんを見た。

「段取りの時間配分、目安とする調理の時間。厨房の全てに於いて、体内時計を正確に動かすことができないと、お客様に迷惑をかけることになるんだよ」

僕はカウンター側調理台のステンレスの引き戸をスライドさせて、ゴールドドリンク用のグラスを4つ取出し、厨房出入口にある製氷機へ歩き、グラスに氷を入れる。

「体内時計…。体にたたき込む…ですか…」

ちょっと難しがった顔を見せて、さうつぶやく蒼ちゃんに、

「たとえばさ、蒼ちゃんは夕飯を作る時…そつだなあ、煮物なんかする時は支度時間や煮る時間、調味料の配合量などを量り考えて作つてるかな?」

僕は蒼ちゃんに尋ねた。

「…そういう時間…気にしたこと…ないです。調味料も目分量だし…」

「そうだらうね。それが『家庭の料理』の醍醐味でもあるから僕はひとつ頷き、呼吸を置いた後、

「でもね、僕らがお客様に提供するのは、たとえ小さなカフュとはいえ、目分量の家庭の料理ではなく、お金をいただくプロの料理です」

いつも変わらぬ味の提供と、お客様をなるべくお待たせしない、無駄な時間を省いたスピーディーな調理や事運びに加えて、どんな些細なことでも気配りのできるゆとりと視野を持つ」とい。

これが、厨房での大切な仕事なんだって心構えを、僕は蒼ちゃんに身を持つて知つて貰いたいと思つ。

それは、決して短時間では身につけることができないことが当たり前なんだって事を、しっかりと自分に言い聞かせながら蒼ちゃんに向き合つ。

僕にとつても新しい学びの時だ。

普段通り仕事を進めながら、彼女のメンタルも伺いながら、ゆっくりと確実に教え込む作業に緊張しないわけがないけど、そんな感情を前に出しては彼女が大なり小なり不安になるだろう。

なるべく平静に。いつでも変わらぬ味を提供するには、調味料の配分をちゃんと覚えなければいけないし、ゆとりある視野を持つ為には、しっかりと段取りや時間配分を身につけて、頭ではなく、体で備えることが大切だつてことを蒼ちゃんに伝えた。

僕も父から、時には厳しく、時には笑いを交えてしっかりとそれらをきつちりと体にたたき込まれたからだ。

(申し訳ないけど僕には笑いを入れるゆとりがないけどね…)

「メモに頼ると、メモを追う時間のロスが生まれるんだ。この仕事は実地経験を重ねないと、身につけられないことの方が多いしね」「僕は、冷蔵庫からアイスコーヒーと業務用のアイスティーを取り

出し、

「…ひしたドリンクを注ぎ入れる量だつて、メモをするより、ひとつでも沢山自分で作ったほうが分量の感覚を早く覚えられると思うよ」

氷の入ったグラスのひとつにアイスコーヒーを注ぎ入れた。

「お姉様に出すドリンクの量は基本グラスの8分目です。見た目もそうだけど、ウェイターが運ぶ時にも難の少ない適した量つてやつだよ」

僕は、蒼ちゃんに残り2つのグラスにアイスコーヒーを注ぎ入れるよう促した。

「…8分目…8分目…」

ゆっくりと丁寧にグラスに注ぎ入れる蒼ちゃんの慎重さと真剣な顔を見て、思わず顔が綻びそうになるのをこらえた。

「あ！ 入れすぎたっ！」 僕の入れたグラスとの僅かな量の違いに、思わず力のこもった悔しそうな声を上げた蒼ちゃん。
(…なるほど…これが、素の彼女の声か)

ちらりとだけど、漸く見えた蒼ちゃんの素の感情に、僕は心の中で安堵した。

「簡単そつで…中々難しいですね…」

そつぶやきながら、もうひとつグラスに再度アイスコーヒーを注ぎ入れる。

「あつっ！ また入れすぎたっ！」

落胆してグラスを見つめる蒼ちゃんに、

「これから、僕らの休憩のドリンクは蒼ちゃんが入れてください」

僕は笑みを向けて、

「それに慣れたら、お客様用のドリンクを蒼ちゃんに任せます。しっかり練習してね」

そう告げると、

「よし、じゃあ、カウンターにドリンクを出して」

僕はアイスティー作りを教えた後、蒼ちゃんに声をかけた。

カウンターには楽しげに厨房でのやり取りを見つめる葉月が、蒼ちゃんが注ぎ入れたアイスコーヒーのグラスを待ちわびてる。

「あっ！ しまった！ 水やりしてる充月の」とすっかり忘れてたつ！」

葉月はフロアに不在の充月君を思い出し、

「ちよっと声かけてくるから待つってね」

眩しい笑顔の後、軽やかな足取りで、店の出入口のドアの向こうに消えた。

「ひまわりだ……」

葉月の背中を見つめてそつそつとやく蒼ちゃんに、僕は思わずはつとした。

その顔は、とても柔らかで楽しげな笑みを浮かべていた。

(ひまわり…か)

蒼ちゃんが感じた葉月のイメージが僕と同じこと嬉しさを隠せなくなり、思わず口元が緩む僕を横田で一瞬ちらりと見た蒼ちゃんは、

「…つくし…」

ひとつにめりとした笑みを浮かべて、つぶやいた。

…つくし？？？

え？ つくしつひ…なんだうひ…？

僕は、小さく咳払いと苦笑いをして、出入口を見つめた。

気になる人

「…あの…」

(誰だ…？　この人)

振り向いた目の前に涼しげな笑みを浮かべて立つ、やや長めの黒髪の男の人は、俺の記憶のどこを探つても見当たらなかつた。

姉の事を知り、親しげに『葉月ちゃん』て呼ぶつてことは、店の常連客だろうか…。

いけないとは思いつつも、いきなり知らない男に声をかけられ、眉間に少しシワが寄る。

「あの…、どちら様でしょうか？」

男の人を探るように見つめてそう尋ねると、

「あー、俺？」

そう言つた後に店の並びの民宿『波音^{なみね}』を指さして、

「俺、あそこで住み込みのバイトしてんの。でもって、アイビーの常連」

にこやかに笑つて、軽く身のうちを明かした。

(やつぱり常連客か)

「すいません…、俺、今日から手伝い始めたばかりで何も知らなく

て…

とりあえず頭を下げた。

「うん、昨日葉月ちゃんからさらつと聞いた。彼女と一緒に夏休みの間、店手伝うんだって？」

「はい…」と返答し頷きつつ、男の人を観察する。

黒いVネックのTシャツに、カーキ色のカーゴパンツ。なんか見えた目ひょろりとして、若干病弱そうな肌の色だ…。

（なんかすげー太陽が似合わない人だな…）

「ねえ、彼女って

「ちょっと！ はじめ君っ…！」

カウベルの音と同時に、ちょっと怒氣を含む姉の声が響いた。

「おっ、葉月ちゃん、おはよー。今日も変わらぬかわいさだね～」

「よっ」と手をあげる、はじめ君と呼ばれる男の人は、にっこりと笑つて姉に声をかけた。

「…充月、休憩時間だよ。蒼ちゃんがアイスコーヒー入れてくれたから店戻つて」

姉は若干ひきつった笑顔を俺に向けた。

「あ、いや…でも」

話しかけられた人は、店の常連さんなわけだから、話の最中に店に休憩に戻るなんて、ちょっと失礼じゃないか？

そんな事を考えつつ姉に視線をやると、

「いいから早く行つて」

今度は真顔でそう言い切られた。

「…わかつたよ…」

何だかわけのわからないまま、姉の迫力に気圧されて、俺ははじめさんに会釈して店内へ戻るために踵を返した。

「またね、弟クン」

姉の真顔に反するように楽しげな笑みを浮かべて、はじめさんは俺に軽く手をあげた。

(なんなんだ…？ わけわかんね…)

小さく息を吐いて、店内に戻ると、カウンターの奥から蒼と洋一さんが横並びでじっと見ている。

「あれ？ 充月君、葉月は？」

「あ、外でお客さんとなんか…」

洋一さんにどう説明したらいいのか躊躇した。揉めてるつてのはちょっと違うような…。でも、和氣あいあいと立ち話つて感じでもないし…。

思わず苦笑がこみあげた俺を見て、

「はじめ君だな…」

洋一さんは、俯き加減でやれやれと苦笑いして、厨房から出でてきた。

(何で相手が誰かわかつたんだ…？)

疑問符を浮かべてしまい、はい、と返答ができず「洋」さんに視線をやると、

「ちょっと2人で休んでて」

やんわりとした苦い笑みを浮かべて表に出でいった。

「…どうなってんだ?」

まさか、姉を挟んでのちょっとした三角関係とか…

「…ははっ、んなわけねーか…」

漫画やドラマもあるまいし…。

(つーか、あの人、俺に何を言いかけたんだろう)

そんな事を考えながらカウンターへと歩くと、

「北村っ！」

カウンター厨房側から蒼が俺を呼ぶ。その顔は、上気して結構楽しそうだ。

カウンター席に腰掛けると蒼は、

「お、お疲れ…様」

照れくさそうにカウンターへ手を伸ばして、アイスコーヒーを俺の前に置いた。

「お疲れ、ありがとう」

短く礼を述べて、俺は早速渴いた喉を潤す。

「…どうだ?」

蒼は、俺をじっと見つめて様子を伺うけど、

「え? 何が?」

意味がわからず聞き返す。

「アイスコーヒー…どうだ?」

蒼は若干口を尖らせて再度俺に尋ねた。

「えつ！ もしかして、これ、蒼が作ったのか？」

思わず田を見開き、蒼をじっと見つめて返答を待つと、

「作ったんじゃないつ！ グラスにアイスコーヒーを注いだんだつ！」

膨れつ面で声を荒げた。

「ちょつ、注いだだけつて…」

いや、それでどうだ？ と聞かれても…。

「…馬鹿にしたな？ 注いだだけつて言つけど、これが中々難しい
んだぞつ…」

蒼は洋一さんから教わった、ドリンクの量を俺に話した。その顔
は熱心でいて、すく楽しそうだ。

「8分目をクリアしたら、お客様に出すドリンクを任せて貰える事
になつた」

蒼は嬉しそうにアイスティーを飲んではにかんだ。

「そつか、がんばれよ。…なあ、洋一さん、近くても大丈夫か？」

先刻、横並びだった2人を思い出して蒼に尋ねてみた。

「…つくしだと思えば、平氣だつ」

蒼は小さく笑みを浮かべて鼻を鳴らした。

「ちよつ、お前、つくしつて…」

吹き笑いしそうになつた俺に、

「北村のお姉さんの彼氏さんの事、じつは…呼んだらいいかな…？」

蒼は照れくしゃみに尋ねた。

「…オーナーでいいんじやないか？」

（ぶつちやな洋一さんとは呼んで欲しくない…って心情は伏せとこう…）

俺は小さく笑って蒼を見た。

「…オーナー…」

蒼は、ひとつづぶやいて出入口に視線をやった。

「つか、姉ちゃん達、外で何やってんだろう？」

野次馬心がうずく俺の心中を察したのか、蒼は厨房から出て、

「…あそこからちょっと覗いてみたらどうだ」「

出入り口横の出窓へと歩き出した。

「こやつ、お前、それは良くないと理解だ」

…とは言え、俺も忍び足氣味で出窓へと歩き、少しそりと外を覗いてみた。

「…北村のお姉さん、何だか怒ってるみたいだな…」

腕組みをして膨れつ面の姉を見て、蒼はつぶやいた。

「…なんだよ…、あの男のお客さんを見たら、姉ちゃんすげー不機嫌になつてさ…」

はじめさんと姉の真ん中に割つて入る形になつてゐる洋一さんは、苦笑いを浮かべて何かを話しているのだが、会話がうまく耳で拾えない。

「…まさか…、つくしのライバル…？」

蒼は再度小さくつぶやいた。

「…いや、よくわからんねーけど…」

俺は苦笑して息をひとつ落とした。

「ヤバイっ！ 戻つてくるぞ！」

蒼は慌てた声を出して走り出す。その後に俺も小走りして互いの位置へ戻り、素知らぬ振りで、銘々の飲み物を喉に流し入れた。

(やれやれ…全く…)

僕は止む事のない苦笑いと、深いため息をひとつ落として店の表で向き合つ2人に歩み寄る。

「充月に余計な事言わないでって言つたじゃない」

葉月の声はなるべく声を荒げずに平静を保とうとしているのか、単に頭に血が上りすぎて引いてるのか…。

普段よりも格段に声のトーンが低い。

(多分両方だな…)

普段滅多に見せない冷淡な表情がそれを物語つてゐるといつのもある…。

「別に余計な事なんて。オレはただ、弟クンを見かけたから、挨拶程度に声かけただけでしょ？」

はじめ君は、普段通り涼しげな笑みを浮かべながら、葉月の牽制を受け流してゐる感じだ。

「それは本当に世間話なのかしらね？…世間話とこいつのネタ集めじゃなればいいんだけど」

葉月はにつこりとした笑みをはじめ君に向けたけど、僕には全く笑つてないよう見えた。

「ネタ集めなんて人聞きの悪い。取材つて言つて欲しいな」
はじめ君は肩を揺らして楽しげに笑つた。そんなはじめ君を見て、

「言つとくけど、はじめ君に提供するネタなんて一個もないから」
鼻をひとつ鳴らして、

「蒼ちゃんには絶対に近づかないでね。蒼ちゃんは絶対にあなたが苦手だと思つから」

これでもかと言つべから『冷たい言葉をはじめ君に放つ。

「本当、葉月ちゃんて可愛いな」

はじめ君は愉快そうにクスクスと笑つて、

「でもって、相当な過保護だ」

長い前髪から少し覗く、切れ長の瞳は、明らかに葉月を挑発してるように感じた。

（これ以上はマズいな…）

「2人共、いい加減その辺で止めときなよ」

僕は2人の間に入つて険悪な空気を断ち切ろうと声をかけた。

「洋一は黙つてて。これはウチの家族の問題もあるんだから」「葉月の家族の問題なら、間違いなく僕の問題もあるわけだから、黙るつもりはないよ」

怒りに少々我を忘れてる葉月には、回りくどく『言葉よりもストレートな言葉のほうがよく届く事を僕は知ってる。

「言つたろ？ 気負い過ぎるのは良くないって」

葉月に真っ直ぐ視線を向けると、はつとした表情を浮かべて、

「…」じめん。熱くなり過ぎ…」

俯いてしょんぼりとした声を地面に落とした。

「はじめ君…」

僕ははじめ君にも真っ直ぐに視線を向けて、

「葉月の失礼な態度、本当にすみませんでした」

そう言って頭を下げた。

これは、店の主としてのケジメの謝罪だ。

「それから、充月君と蒼ちゃんのプライベートに関しては、深く立ち入つてくるのはどうか止めてください」

僕はひと呼吸置いて、

「店側の人間にも、プライバシー保護の権利はあります。それに彼らは未成年者で、まだ感情だって行動だって全てに於いて未成熟です」

「

葉月は唇を噛みしめてはじめ君を見つめる。

「僕らは僕らのやり方や考え方で、ゆっくりと彼らを見て成長を助けてあげるつもりです」

明確で的確、迅速な救済なんて、まだまだ未熟で不器用な僕らには到底無理だ。

だから、今僕らの力で最大限出来ることをやる。

「その為には、葉月の元気な笑顔が必要なんだよ

僕は、萎れた顔の葉月に小さく笑みを向けた。

蒼ちゃんが見せた柔らかい笑顔と、葉月をひまわりみたいだつて言つてくれたことは、僕には蒼ちゃんにとって、とても大切なひとつ

の感情だつて思つたからだ。

きつとこれからも、葉月の前向きさや笑顔は僕らの大きな救いになるとと思う。逆に僕も彼女が無理して笑うではなく、いつでも自然と笑顔になれるよう傍にいたいと思ってる。

「蒼ちゃんが、葉月はひまわりみたいだつて。さつき、いい笑顔見せてくれたよ」

僕は、葉月にそつと耳打ちした。

「本当に…？」

葉月は顔を上げて、嬉しそうに手を見開いた。僕は、小さく笑つて頷いた。

「さあ、店に戻ろう。蒼ちゃんが入れたアイス」「コーヒー、飲まなきや」

「そうだっ！ アイスコーヒーっ！」

葉月は思い出して、

体を店の出入口へ向けた。

「べーだ。はじめ君のばーかつ！」

葉月なりのリセットなのだろう。そう言って、舌を出して些かスッキリした顔で店内に消えた。

「本つ本当に可愛い娘だな」
はじめ君はケラケラと笑つて頷いた後に、

「…やつぱオレ、オーナー嫌いだわ」

さう言つて僕に毒を吐いたけど、顔は何だか嬉しそうにも見えた。

「僕は嫌いじゃないですよ。はじめ君の事」

苦笑いして一言告げると、

「…いや、悪い。オレはそういう趣味はないから」

引いた声で口元を歪ませた。

「いやいやいや… 僕だつてそういう趣味はありますよ…」

思わず上げてしまつた大声に、はじめ君は愉快そうにケラケラと笑い声を上げて、

「ま、頑張つてね〜」

ヒラヒラと手を振り、波音に向かい歩き出した。

そんなはじめ君の背中を見つめつつ、僕は深く息をついて苦笑いした。

(…ウチの家族の問題…か)

先刻葉月が放つた言葉を思い出したら、少しだけ胸がチクリと痛んだ。

「…まあ、仕方ないか…。僕らはまだ家族じゃないわけだしな…」

これ以上の苦笑は浮かべたくない。やつれて何となく空を見上げた。

「ハハハ… ハーハー！ 何サボッてんのよっ！」

足元から聞こえた、おしゃまな幼子の声に僕は、はっと我に帰る。

「あ、舞花ちゃん… おはよっ」

僕は、田線を下に落として、やつぱり苦笑してしまうわなで。

「おはよっ、洋一君」

少し離れた場所から聞こえる低く耳触りの良い声に顔を向けると、一軒先のサーフショップのオーナーの和俊さんが僕に笑みを向けて歩いてきた。

(開店時間だ)

こつも一番に来る常連さん父娘を見て、僕は気持ちを切り替えた。

来客

店内にカウベルが鳴り響き出入口に視線を向けると、さつきは怖い顔して怒つてたっぽい姉が上機嫌な笑顔でこちらを見て歩いてきた。

「じめんね～っ！ せつかく蒼ちゃんが初めてアイスコーヒー入れてくれたのに」

カウンター席、俺の隣に腰掛け蒼を揉むように手を合わせて蒼を見つめると、

「…氷…だいぶ溶けちゃったのですが…」

蒼は、姉にびっくりしたらしいのか助けを求めるような視線を送つてつぶやいた。

「氷が溶けててもいいわよ～ そのままちょうどいい」

姉は蒼に向かい声を弾ませた。

(…問題は解決したんだろうか…)

「姉ちゃん、洋一さんは？」

まだ外から戻らない洋一さんが気になつて、尋ねてみたら、

「洋一、うん。すぐ来るわよ」

問題ないと言つた笑顔で短い返答がきた。

「…お…疲れ様…です」

蒼が照れくさそうに、姉にアイスコーヒーを差し出すと、

「ありがとう」 ねえ、蒼ちゃんもひかでひよつと座りなよ。

立ちっぱなしで足、疲れたでしょ？」

姉は蒼に手招きをして、カウンター席に呼ぶけど、

「…私はここがいいんです」

蒼は、やんわりと首を横に振り小さく笑みを浮かべた。

「そっか。蒼ちゃん、厨房の仕事はどう?」

アイスコーヒーに刺さるストローをぐるぐると回しながら、姉は蒼に尋ねた。

「…まだまだ知らないことばかりですが…」

少し俯いてひと呼吸置いた蒼は、

「ちょっと楽しいかも…」

照れくさがり、そうつぶやいた。

「楽しいなら良かつた～っ！ あ、ねえ、洋一はどう？ 話し方とか態度とか厳しすぎないかな？」

「…オーナーは、大丈夫です。とても親切です」

(あいつすげー照れてる)

真っ赤な顔でつぶやいて、アイスティーを飲む蒼を見て、俺は込み上げる笑いを堪える為に俯いた。

そんな俺に気付いたのか蒼は、

「…北村…私を馬鹿にしてるのか…？」

更に赤くなり、プルプルと小さく震えながら、口元を歪ませた。

「んもう～～！ 蒼ちゃんたらか～わい～い」

蒼を見て姉は小さく悶えて、

「やつぱり弟より妹よね～！ 断然妹がいいわよ～！」

「隣に実の弟がいるのに、失礼じゃね？」

俺は鼻を鳴らして姉にじと目を投げてやつたけど、

「弟はおつきになると冷たくなるからやだ」

ははんっと笑つてじと目を返された。

「べつ、別に…冷たくなんか…」

「してないとも言い切れないか…。高校入ってから姉に隠し事とか増えたしな…。」

「いいのよ、充月に冷たくされても、私には蒼ちゃんと言つかわいい妹分ができたんだから」

姉は、「弟はお払い箱つて事で」と蒼に向かつて笑顔を向けた。

…何それ、酷くね？

俺は、やれやれと苦笑を浮かべて盛大にため息をついた。そんな姉弟のやり取りを見て、蒼は楽しそうにクスクスと笑つて肩を揺らした。

そんな蒼を見て、安堵の笑みを浮かべた姉を横目で見て、ほんの少しだけど申し訳なさが胸に滲んだ。

その時、カウベルが鳴り響き、俺達は一斉に視線を出入口へと向けると、

「はーちゃんっ！ おっはよーっ」

金髪ショートヘアの…

(うつわああ…、何かミーマムなギャルがきた…)

かなり派手な幼女が姉の元へと駆けてきた。

「おっはよー 舞花ちゃんっ、今日も朝からバツチリ決まつてじやない」

姉は椅子から立ち上がり、両手を広げてちびっこを胸で受け止め、抱き上げた。

「おはよ、葉月ちゃん」

「和俊さん、いらっしゃい」

出入口からこちらに歩み寄る、明るい茶髪に小麦色の肌の男性が、姉に向かって手を上げた。

(お客さんつー！)

俺は立ち上がり、

「いらっしゃいませー！」

と挨拶をしたら、

「おひ、おはよ。葉月ちゃんの弟だね？」

一カツと笑ってカウンターへと歩き、椅子に腰を下ろした。俺は会釈して「はい」と笑みを返した。

「はーちゃんつー！　はーちゃんの弟つー、超イケメンー　舞花ヤバいつ！」

姉にしがみ付き、足をバタバタと踏み鳴らして、舞花ちゃんという名の幼女は、顔を真っ赤にしてはしゃいでる……。

「つたぐ…、イケメン好きはママに似たんだな…」

カウンターに座り、舞花ちゃんにじと目を向けた和俊さんと呼ばれたお客さんに、

「そんなイケメン好きなママが、なんでパパなんかと結婚したのか、舞花には意味わかんないし」

小生意気な口調でそう言つて、やれやれといづれスマチャードを見せた舞花ちゃんに、

「あのなあ…男はなあ、外見ではなく中身が大事なんだよ」
苦笑いして和俊さんは

「なあ？ 洋一君？」

厨房に入つた洋一さんは同意を求めた。

「ええ…まあ…」

洋一さんはやんわりと笑みを浮かべて、

「蒼ちゃん、お密様に挨拶を」

いつの間にかカウンター向かいから姿を消した蒼に手招きをして

呼び寄せた。

（大丈夫か…？）

俺はカウンターにお冷やと紙おしごりを2つ出して、ちらりと厨房の中を見た。どうやら蒼はドリンク用冷蔵庫の横に身を隠したようだ。

だけど、洋一さんの手招きに応じて、おずおずとだけど、横歩きでカウンター向かいに出てきた。

「おっ、何？ カわいい娘が厨房入つてるじゃん」 和俊さんの声に、身を固めた蒼は、俯いたまま小さな声で「いらっしゃいませ…」とつぶやいた。

「すみません、彼女、とても緊張してて」

洋一さんは申し訳なさそうに和俊さんに笑みを向けた。

「あー、気にしなくていいよ。慣れるまでは仕方ない、仕方ない。いや、しかし、こりゃ毎日アイビーに来る楽しみが増えたなあ」
カラッと明るい声を発して、蒼に笑顔を向けた。

「はーちゃん…、あの…もしかして…」

カウンター席、和俊さんの横に座った舞花ちゃんは、姉をじっと

見つめてる。

「うん、充月の彼女だよ」姉は若干申し訳なさそうに舞花ちゃんに笑みを向けた。

「…むむむっ！ とこいとこいとせ、舞花のライバルってことだね！」

舞花ちゃんは両手を握りしめて、気合を入れた。
おいおい…勘弁してくれ…。

悩みながら。

「蒼ちゃん、ちょっと手伝ってくれるかな？」

アイスコーヒーと一緒にシングサービス用のトースターにゆで卵を、カウンターに座る和俊さんと舞花ちゃんに出した後、毎日来店する常連のお客様で、店内は賑やかになつつあった。

カウンターに向かい少し俯き加減で立ち、お客様のフレンドリーな会話に小さく相槌を打ちながらも、蒼ちゃんの顔には笑みが無い。カウンターに座むお客様は皆、「近所さんで、僕が小さい頃から知ってる人ばかりだし、当たり前のようだ」と会話に遠慮はない。葉月の弟の彼女といつ蒼ちゃんに皆は、やつぱり興味津々で…。

中々会話が途切れることなく、それが彼女には相当辛やつて見えてとれた。

（少し距離のある厨房内からでもこの状況はやつぱり厳しいみたいだな…）

なんとか相槌を打ち、はい、いえの受け答えで必死で耐えてるようを見える蒼ちゃんの強ばる体や気持ちを、少し楽なほうへ切り替えてあげなければ、きっと身も心も1日持たないだらうなと思った。

僕は蒼ちゃんに厨房の中の仕事を振ることにした。

「…何をすればいいですか？」

カウンターに背を向けた蒼ちゃんは、驚くほどはつきりと安堵の顔を僕に見せて、言葉を発した。

（僕のこと、少しは大丈夫になってくれたのかな…）
それとも、僕にすら縋りたくなる程に気持ちが一杯一杯だったのか…。

その心情はわからないけど、どうであれ、僕は嬉しさで思わず笑みがこぼれそうになつた。

でも今は堪えることにする。蒼ちゃんに対する急激な距離の縮め方は、なるべく避けたほうが良い気がしたからだ。

「ランチ用のミニサラダを器に盛り付けてください」

僕は、浮き上がりそうになる声を押さえて、冷蔵庫から仕込みを終えたサラダの材料を取出して、トレイに並べたガラスの鉢にひとつ見本を作り、蒼ちゃんに残りの器への盛り付けを頼んだ。

「ガラス鉢全部に盛り付け終えたら、ラップをかけて冷蔵庫へお願
いします」

僕の指示を受けて、蒼ちゃんは「はい」とひとつ返事をして、サラダの盛り付けに取り掛かる。刹那、ボールに伸ばした彼女の両手を見ると、小刻みに震えていた。

「…大丈夫？」

僕はなるべく負担にならないように、一言だけ声をかけた。そんな僕の言葉にはつとして、蒼ちゃんは、「平気です！」

両手を下に隠して、少しだけ声を大きく発した後、唇を噛みしめた。

俯き加減のその顔は、悔しそうな色を含んだような苦い顔だった。

「モーニング、アイスコーヒー（ワン）をお願いしますー。」

フロアから葉月の声と共に伝票が置かれる。

「はい、アイスコーヒーね」

僕はオーダーを受け取り、蒼ちゃんに「じゃあ、サラダは蒼ちゃんに任せたよ」と声をかけた。蒼ちゃんは返事の声の変わりに、ひとつ大きく頷いた。

（…わて、どうじょうか…）

蒼ちゃんから離れて、カウンター側でトーストを焼き、モーニングのセットをしながら、これから迎える忙しいランチタイムを考え、一通り頭の中でショミューションしてみる。

（…こけるだらうか…）

盛り付けの補助と、厨房から料理を葉月と充月君に出す。それから、下がってきた器やグラスを受け取り、補助の合間にそれを洗う。難しい作業ではないと思つけど、カウンターに向かえば些細ではあれど接客はついて回る。

（…中に引っ込めっぱなしでは、彼女が店を手伝う本来の目的が疎かになってしまふからなあ…）

昨日蒼ちゃんが言つた「変わりたい」という言葉と、先刻の悔しそうな顔を思い浮かべた。

(…抗う姿勢が見える「ちはは、過剰に保護しないほうがいいか…）

アイスコーヒーを準備した後、トースターから焼けたパンを取出し、プレートに乗せてゆで卵を添えて、トレイに置き、オーダーの品を待つている充月君に差し出し、

「3番テーブルにお願いします」

僕は声をかけた。

「3番テーブル、はいっ！」

充月君は少々強ばる顔でトレイを受け取り、緊張しながら3番テーブルへと歩いた。

(あ…、伝票忘れてる)

カウンターに取り残された3番テーブルのお客様の伝票を見て、僕は小さく笑みを落とした。そんな僕に気付いた葉月は、お帰りになるお客様のレジ作業を終えて食器を下げる後に、

「充月、相当緊張してるわよねえ…」

何やら楽しそうに僕に食器を差し出した。

「初日だからね。仕方ないよ

僕は葉月に伝票を渡して、

「葉月も初めは似たような感じだつたし…、いや、もっとヤバかつたかもな」

5年前の葉月を思い出したら、思わず笑いがこみあげた。
「ちよつと… やだつ！ 何思い出し笑いしてるのでっ！」

葉月は恥ずかしそうに膨れつ面をしながら、僕から伝票をひったくり、充月君のもとへと歩き出した。

やれやれ…、と息をつき、僕は厨房の中央調理台に向ける。

「……」

蒼ちゃんはスローペースだが、しかし真剣にサラダの盛り付けをしている。（賄いを作る時に、少し包丁を握らせてみるのもありかな…）

そう考えてた矢先に、「よ～じさてー。は～ちゃんって彼女がいるのに、わかいおんなのこ見てられりやつしせ…」
カウンターから舞花ちゃんの小生意氣な声と、刺さるようなじと目が…。

「洋一君、浮氣はいかんよ、浮氣は…」

舞花ちゃんの隣で便乗して、楽しげに僕を茶化す和俊さんを見て思わず、

「ちよつ…、ち、違いますって」

そう声をあげて苦笑いを浮かべずにほいられなかつた。

「充月、伝票が違うよ。5番テーブルのお客様に先に出さなきゃ」

モーニングを運ぶ俺を呼び止めて、姉は伝票を差し出して少し厳しい声を向けた。

「…」「めん…」

伝票を受け取り、2番テーブルへ向けた足を、360度回転させて、5番テーブルの方向へと進める。
テーブルの隅についてる銀のナンバープレートを確認して、

「お待たせいたしました」アイスコーヒーとモーニングの皿をギヤルっぽい女性三人組のお客さんに出す。すると、「ごめん…ストローくれるかな?」

その中の一人が俺を見上げて苦笑いした。

「あつ！　すいませんっ！」

慌ててカウンター横の収納ラックへ戻り、ストローを3つ取出してお客様の元へと早歩きで向かう。

「すみませんでした。お待たせいたしました」

ストローを差し出すと、不愉快な顔ではなく「ありがとうございます」と温かい笑みを返されたので、安堵混じりで再度頭を下げて踵を返した。

(確か一番奥のテーブルのお客さんが帰ったよ…)

テーブルを片付ける為にそっかに向かうと、そこはもう綺麗に片付けられていて、客を迎える準備は万端だった。

(くそ、早えな…)

カウンターで常連客のちびっこと楽しげに話してゐ姉を見て、ため息がこぼれた。

初日とはいえど、正直俺はもう少しうまく仕事がこなせると思つてた。

ウェイターって仕事は大して難しくはないなど甘い考えがあつたのは否めない。

何故かといふと、姉は人なつっこさや明るさはピカイチだが、根は結構鈍臭い人間だつてわかつたからだ。そんな鈍臭い人間が何年もこの仕事を続けてるなんて、正直こなす仕事が大して難しくないからなんだろうなと思つてた。

勿論それだけじゃない。洋一さんの存在があつての事つてのは謂うまでもなくだけど。

ちょっと決めつけて姉を、仕事を見下していた自分が情けないと感じてしまつた。

(蒼は、どうだらうか…)

厨房に視線をやると、蒼は洋一さんと何かしらの作業をしていた。

(…樂しかつだな…)

…なんだろ…。

今ちよつといつかとしたよつな。

「充月、ちよつと

カウンターにいる姉が俺を呼ぶ声にはつとして視線を厨房から離して、姉のもとへと向かうと、

「2番テーブルのお客様がもうすぐお帰りになるから、レジよひしくね」

そう告げた矢先に、2番テーブルのお客さんが立ち上がり、こちらに歩いてきた。

(…なんでもう帰るつてわかるんだ?)

思わず眉間にしわが寄りしうになるのを堪えて、レジに立つと、「あ、そうだ。コーヒーチケット、もつすべ無くなるよね? 一冊お願ひ

年配のお客さんは、財布を取出して気恥ずかな笑みを俺に向けた。

「チケット…、あ…、すみません。えつと…」

慣れない指でチケットの金額を打ち、代金を貰い、

「ありがとうございました」

と、頭を下げた。

カウベルが鳴り、お客さんがドアの向こうへと消えた時、

「しまつた!」

自分がおかした大きな失敗に気付く。

「…チケット買った人の名前がわからんねえ…」

さつきのモーニングの支払いもチケットだし！ ヤバイ！

「姉ちゃん！」

俺は慌ててテーブルを片付けてる姉のもとへ走り、
「さつきのお客さん、チケット買つてつたけど、名前聞いてないん
だけど…」

絶対怒られる事を覚悟して、姉に自分の失敗を告げた。

「さつきのお客様は下川さんよ。毎日来るお客様だから、ちゃんと
覚えてよ～」

姉はにこやかに笑つて、
「チケットの下に名前を書いて、チケットボードにかけておいてね。
それから、今日の分のチケット、忘れずに伝票にホツチキスで止め
ておいてよ～」

…そうだ、チケットだ。ホツチキスだ。

これ、業務開始から何回姉に言われただろう…。

(…ダメだな…全然役立たずだ)

ちょっとへこんだ…。意氣消沈した姿なんて見せたくないけど、
歩くと知らず知らず肩が下がる。

「初日なんだから、仕方ないわよ。大丈夫よ、目や体が慣れるまで
は中々動けるもんじゃないから」

姉にせつぜられて背中をぽんと叩かれた。

「……」めん。俺……

「あんたの悪癖だよね。昔から、打たれ弱いくせにやたら気負いが激しいとこ」

姉は楽しげに笑って、

「ほんっと嫌なとこ似てるわ……」

一言いじめて、

「短時間で全部完璧にできるなんて、思ひ切らダメよ～出来なくて当たり前なんだからさ」最初は

そう言つた後に、

「ていうか、ここでバイトを始めた初日の私より、今の充月のまつが、うんと役に立つてるとこが ムカつく

姉は俺に小ちく舌を出して苦笑いを浮かべた。

「……どんだけヤバかったんだ……？」

俺も思わず姉に苦笑いを返した。

「……あの洋一が悲鳴あげそつくなるへり……」

そう告げて、思いだし笑いを始めた。

洋「せんが悲鳴…？」

ちょっと何があつたのか、想像つかないけど、余程の事をやらかしたには違いない。

「沢山の失敗があつたからこそ、今の私があるのよ」
そう誇らしげに笑う姉が、ちょっと眩しく見えた。

「がんばれっ！ 女性密に愛されるイケメンウェイターになる為に
」

おーっ　と右手を小さくあげて張り切る姉を見て、

「別に愛されたくねーし」
やれやれという笑みがこぼれた。けど、失敗で沈んだ心がいつの間にか浮いてた。
悔しいけど、姉は昔の鈍臭い姉ではなく、いつの間にかしつかり者の中になつてたんだなつてはつきりわかった。

「蒼ちゃん、休憩のドリンクお願い」

モーニングタイムが終わり、賑やかだった店内に静寂が戻る午前11時過ぎ。

初日ということもあり、あたふたしながらフロアを右往左往していた充月君は、ちょっと疲れてる感じがした。

蒼ちゃんはと、お客様が減っていく度にプレッシャーから解放されるのがはっきりと見て取れて、静寂の戻った今はやんわりとだが、笑みまでもを浮かべて中々元気そうだ。

「8分目…？」

グラスにアイスコーヒーを注ぎ入れ、僕にこれでどうかな？ と
いう伺いの視線を向け、返答を待つ。

「お、ちゃんと8分目。よくできました」

笑みを向けると、蒼ちゃんは俯いてにんまりと笑って、小さな声で「よつし」とつぶやき、残り2つのグラスにもアイスコーヒーを注ぎ入れた。

最後に自分用のアイスティーを作り終えると、

「…ドリンク準備できました」

小さく笑んで僕に一言告げた。

そんな彼女の笑みを見ると、また距離が少し縮まった感じがして、思わず僕もつられるように小さく笑んでしまった。

そんな僕をちらりと見て、蒼ちゃんは頬をほんのりと赤らめて、

にんまりと笑つて俯いた。

（うん、何だかいい感じだな…。でも、数時間でここまで打ち解けるきつかけって、何かあつただろうか…）

厨房の中での数時間をざつと思い返してみたけど、きつかけといつきつかけは見当たらなかつた。

まあ、しかし、彼女が僕をなるべく警戒せずにリラックスして仕事を手伝ってくれることはとても喜ばしいことだし、このまま少しずつ距離が縮まり、先に繋がるきつかけになれたらなど願いつつ、見守ることにしようと見つかった。

「充月君、葉月、ちょっと休憩入れようか」

フロアに向かい声をかけると、葉月は待つてましたと謂わんばかりの笑顔で「はいはーい」とスキップしながらカウンターに戻つてくる。

その後ろで（いい歳こじて恥ずかしい…）と言いたげなじと目を葉月に向けた充月君は、早歩きで葉月を抜かそうとするけど、抜かれまいと、葉月はダッシュするという暴挙に出た。

「ちょ！ 姉ちゃん！ さつき店内は走るなつて俺に言つたじゃねーか！」

「それはお客様がいる時に限りだよー」

いち早くカウンターにたどり着き、椅子に腰を下ろして葉月は、にじっと笑つた。

「そういう事はちゃんと説明してくれよな…」

不服そうな苦笑いを浮かべて、充月君も椅子に腰を下ろした。

：充月君も緊張から解放されて口数が増えたみたいだ。しかし姉弟のやりとりは中々面白いな。

(二人共性格が良く似てる感じがする)

どちらも負けず嫌いみたいだしね。

姉弟で言い合ひするなんて、一人っ子の僕にはちょっと羨ましい光景だったりもする。

「…お、お疲れ様です」

蒼ちゃんは、照れくさそうにカウンターに向かい合わせた葉月にアイスコーヒーを出してつぶやいた。

「ありがとう　おおっ！　2回目にしてきれいに8分目つ
蒼ちゃん、中々筋が良いじゃない」

葉月はグラスに注がれたコーヒーの量を見て、蒼ちゃんを褒めた。そんな葉月の言葉に、目を見開き嬉しそうににんまりと笑つて「あ

りがとうござります」とつぶやいた後、

「お疲れ様です」

充月君にもアイスコーヒーを差し出した。

「サンキュー。うん…8分目ついてやっぱ微妙過ぎてよくわからんね
えな…」

グラスを受け取り、充月君は苦笑いを浮かべた。

「…もう北村にはドリンク作ってやらないつー 北村はこれから自分でコップに注いだ水でも飲んでるつー」

蒼ちゃんは口を尖らせて鼻を鳴らした。

「つーか水じゃねーよ、お冷やだよ」

充月君も負けじと鼻を鳴らした後、クスクスと楽しげに笑いだした。

「まあ、偉そうに。あんただって、わざわざ水って言つてたくな

に〜」

葉月はぱつとひとつ吹き笑いして充月君にニヤニヤとした笑みを向けた。

「…姉ちゃん、そういうのいつになよ…」

充月君はぱつが悪そうにつぶやき、苦笑いした。

「…オーナー…、お疲れ様です」

蒼ちゃんは照れくさそうに僕にもグラスを差し出した。

(…受け取つても大丈夫だろうか?)

一瞬躊躇したけど、何だか蒼ちゃんは戸惑いなく自然と差し出してくれた感じがしたから、その流れに従つよつに受け取つてみるとした。

「…ありがと」

なるべく手が触れないよつと思つてグラスの上部を掴み受け取り、渴いた喉にアイスコーヒーを流し入れる。

そんな僕をじっと見つめる瞳は、早朝の力のこもったキツいものではなく、何かを期待してゐるような、はたまた何かを求めるよう

な瞳に見えた。

…もしかして。

「蒼ちゃん、…お客様のドリンクは、残念だけじまだ早いよ
僕はグラスを置き、笑みを携え蒼ちゃんにそう告げた。

「…まだですか…」

俯いた顔から落胆の色がはっきりと見えた。そんな蒼ちゃんを見て僕は、

「お客様のドリンクはまだ無理だけど、昼の賄いを作るのを手伝つて貰えると助かるんだけど」

僕の言葉に、蒼ちゃんは結構な勢いで顔を上げて、
「賄い！ やります！ やらせてくれさい！」
なんとも嬉しそうな顔を僕に向かた。

「…なあんか、いい感じで仲良くなつてるね」
葉月は僕らを見て嬉しそうに笑いながら、

「良かつたね、洋二。正直妹ができたみたいで嬉しいでしょ？
そう言つて、アイスコーヒーを一口飲んだ。

「…うだな…。一人っ子の僕としては妹つて結構憧れの存在だから
ね」

僕は笑みを浮かべて葉月にそつ告げた。

「私も兄がいないから…」

蒼ちゃんはそうつぶやき、小さく笑みを浮かべた。

「…やっぱり弟より妹なのか…恐るべし、妹パワー」

充月君は口元を小さく歪めて小さく鼻を鳴らした。

「ドンマイ　いいじゅない、充月にはこんなにステキなお姉ちゃんがいるんだからさつ」

葉月は眩しい笑顔を充月君に向けたけど、

「…俺は、もっと優しくておしとやかな姉が欲しい」　諦め顔で葉月を横目で見て、ため息を落とす充月君に、

「ほあ～う…。これで顔拭いて、田を見まさせてあげようか?」

葉月は、一ヶ口と笑つて、ダスタークロスを手に取つた。

そんな姉弟のやりとりを見て、僕の隣で蒼ちゃんは、クスクスクと楽しそうに笑つた。

(いい笑顔だな)

僕は横目で蒼ちゃんを見て、ホッと息を落とした。

「充月、ランチA2つ、6番様ね」

「6番、はい！」

伝票にレジチェックを入れてトレイを2つ持ち、6番テーブルへ歩く。

「Aセット、お待たせいたしました」

向かい合わせて座るカップルに注文の品をだし、そのついでにお客様さんが帰ったテーブルの上を片付ける。

自ら考えて率先して動くではなく、司令塔である姉の指示に従つて動く。残念ながら、頭は全く回つてない状態だった。

周りを見渡す余裕もなく、慌ただしく過ぎ去るランチタイムをぎりにか乗り切る事で精一杯。厨房にいる蒼の顔も殆ど見ないで、瞬く間に時間が過ぎていった。

客が引いたランチタイム終了の午後1時半過ぎ、テーブルを拭いて「疲れた……」と思わず疲労感が口からこぼれた。

そんな俺を見て姉は、

「お疲れ様～ よく頑張ったね」と、労いの言葉をかけるけど…。

(姉ちゃん、あれだけ動いてよく平氣だよな…)

「この人、化けモンかよ…。そう思つたら、笑顔が引きつった。

「充用つ　待ちに待つたお皿」はんだよ～つ　」

姉の声も足取りも凄まじく軽やかだ。つーか、飯…あんまり食べる気しねー…。

そんな疲労感丸出しで、無言半笑いの俺を見て、

「何？ 嬉しくないの？ お皿」はん。洋一と蒼ちゃんが作ったごはんだよ！」

「いや…、ほんと洋一さんが作ったんだろ？」

やれやれと苦笑いする俺に、

「あんた…、ほんつといっぱいといっぱいだつたんだね…」

姉は、お氣の毒様と言いたげな視線を俺に投げて、
「ごはん、蒼ちゃんが作つてたんだよ。洋一は隣でアドバイスして
ただけ」

「」の上ないご機嫌な笑みで厨房に視線を流した。

「マジか？」

つられて俺も厨房に視線を向けたら、蒼が洋一さんを見上げて嬉しそうに何か話しかけてた。

「蒼ちゃんて、料理上手だつたんだね」

姉は嬉しそうに声を弾ませた。

「…」

俺は返答ができなかつた。何故なら、蒼が料理上手だなんて知らなかつたからだ。俺が知らない蒼に対しても思わず眉間にシワが寄つてしまつた。

「…充月、もしかして蒼ちゃんが料理できるって事、知らなかつたの？」

俺の表情で姉が察知した。

「…他人の事全て知つてゐるなんて、あり得ねーし」

図星をさされた苛立ちから、思わず言ひべきじゃない乱雑な言葉が口をついてこぼれた。

「他人とか…。何その冷たい言い方…。彼女なのに他人で…」

姉はムツとした表情でつぶやいた。

「いや、あの…、違うんだ」

言葉のあやつていうか、心からそういうは思つてないんだつてこと、そんな気持ちをうまく伝える言葉を探すけど全然見つからない。結局口から出たのは情けなくも「ごめん…」の一言だった。

「充月」

嫌でも顔が床に下がる。そんな俺に姉は、

「充月は、なんの為にここに来たの？」

その口調は穏やかだけど、とても強い言葉だつた。
「なんの為にここにいるの？」
(なんの為に…)

はつとして顔を上げると、姉は、

「本当の目的、ちやんと思い出せた？」

ちじかく安堵の息をついて、柔らかな笑みを浮かべた。

「ごめん…。俺…自分の事でいっぱいぱいだった…」

厨房に視線を遣ると、蒼はそわそわとした様子で俺を見つめてた。

「ああ、行こう。彼女の笑顔と、お手製の美味しいハンが待つ
てる」

姉はにしつと笑って俺の肩をポンと叩いた。

「…姉ちゃん、ありがとう」

つぶやいたら無性に照れ臭くなつて、早足でカウンターへと向か
つた。

昼休み

「お疲れ様です。忙しい中戸惑つ事が多くて、かなりきつかったでしょ？」

僕はカウンターに歩み寄る充月君に声をかけた。

「お疲れ様です。…すいません、あまり役に立てなくて…。なんか、あれよあれよと軽い間に終わつた感じです」

充月君は少し落ち込んだ感じでそう答えた。

「その割にはしっかり動けてたよ。初日なのに大したもんだよ、本当に」

「いや…司令塔からの指示を受けて、ただ動いてただけです。實際自分で何やってたんだかよくわからなかつたし…」

充月君は申し訳なさげに苦い笑みを浮かべると、

「正直、最初はウェイターなんて運ぶだけの簡単な仕事だろつて甘い考え方してました…」

そんな充月君の言葉を聞いて、僕は思わず吹き出しそうになつた。

「充月君、初めて葉月が店にバイトに来た時と全く同じ」と言つて
る」

込み上げる笑いを堪えながら、

「やつぱり姉弟つて似てるところが沢山あるんだな」

葉月に視線を向けると、

「私は充月みたいには動けなかつたけどね…」

小ちな苦笑いを浮かべた後、

「そんな事より！　お腹空いた～～！　お皿いはん～～！」

盛大に催促の声をあげた。

「…お疲れ様です」

蒼ちゃんは相変わらず照れくしゃみ、「グリーンのプレートを銘々に差し出した。

「うわ～

美味しそ～～うわ～

両手を合わせて歎声をあげる葉月。その隣で皿を丸くして驚きの表情でプレートを見つめる充月君。
そんな二人に、

「和風ツナスパゲッティです…」

蒼ちゃんはへへっとほにかみ、そう告げた。

「すげーな…。これ…マジでお前が作ったの？」

半ば茫然とした顔で、充月君は蒼ちゃんを見つめた。

「麺類は普段あまり作らないから、とても楽しかった」

蒼ちゃんは充月君の隣に自分の分のプレートを置き、厨房から力 ウンターへと移動した。

僕はいつものように倉庫から四脚の丸イスを運び、厨房の中、力 ウンター側の調理台をテーブルで昼食を摂る事にした。

「わ～　出来たてのうひに食べよ～～！」

葉月は「じつただつきま～す」と声を弾ませて両手をパチンと 合わせて、フォークを手にした。

「い、いただきます…」

充月君は何だか緊張氣味な声を発してフォークを手に、プレートのパスタを凝視してゐる。

「…いただきます」

そつとぶやきつつ、充月君の隣で、一人が食べる様子を不安そうに伺う蒼ちゃん。そんな三種三様の表情を見て、僕は笑いを堪えながら手を合わせて「いただきます」とつぶやいた。

充月君はフォークでパスタを絡め取り、恐る恐る口に運んだ。もぐもぐと数度咀嚼を重ねるうちに、田が驚き輝いていくのがはつきり見て取れた。

「…マジウまい…。すげーうまい…」

蒼ちゃんに顔を向けて、

「本当、びっくりする位うまいんだけど…」これ、本当にお前が作つたのか！？」

驚きに加えて、笑顔で顔を綻ばせながら蒼ちゃんに尋ねた。

「作り方はオーナーに教えて貰つたけど、全部ひとつで作つたぞ」

蒼ちゃんは、どうだ！ と謂わんばかりの顔で、ふふんと笑つた。

「すついぐく美味しい これ、洋一が作るツナスパより美味しいかも！」

葉月は感激の声をあげてどんどんパスタを口に運んでいる。

「蒼ちゃん、本当に手際が良くて僕が手伝う事なんて全くなかった

よ。 わすが毎日夕飯作ってるだけあるよな」

蒼ちゃんに笑顔を向けて「うん、本当に美味しいぞ」と
パスタを口へと運んだ。

「すいー！ 蒼ちゃんの歳で毎日夕飯作ってるなんて！ 私なん
て17歳の頃はチャーハンとか焼きそばとか玉玉焼き位しか作れな
かったわよ…」

「しかも、毎回黄身の潰れたショボイ玉玉焼きな…」

充月君は、ふつ…と吹き笑いしてつぶやいた。 そんな充月君を葉
月は横目でジロッと睨む。

「家に帰ったらい…、料理を作ること位しかやる事がなくて…」

蒼ちゃんは、苦みを含んだ笑みでつぶやいた。

「…誰かに食べて貰って、喜んで貰いつつ、こんなに嬉しい事だつ
たんだなつて…」

蒼ちゃんは俯き加減で小ちく鼻をすすり、パスタを口へ運んだ。

「蒼ちゃん…」

葉月は、せわしなく動かしていたフォークを握る手を止めて、

「これからはここに来る日は、蒼ちゃんが作った餃子を食べさせで
よ

優しい笑顔で蒼ちゃんに語り掛けた。

「僕も是非そういう欲しさと思った。 蒼ちゃんが負担にならない

程度でいいから、どうぞ。」

それが彼女の自信に繋がれば、ということはないと僕は思った。
勿論それだけではなく、彼女が想像以上にできる子だと思える何かを感じたつていうのもある。

これは僕の想像でしかないけど、今蒼ちゃんは『『貰える』こと』で受け取れる喜び』の尻尾に触れたなと思った。

それは、心を込めて作り、提供し、それを受け取る方達の笑顔と
いう幸せを得る事を楚とする、僕の仕事にはとても大切な感情だ。
勿論楚を強固にする技術も必要不可欠だ。そこも惜しみなく彼女
に与えてあげたいなと思ってる。

是非ともこの道に進んで欲しいという願いとまではいかないけど、
これから進むであろう人生の選択肢の幅がひとつでも増えたらいい
なと願ってる。

蒼ちゃんは、フォークを置き、

「軽い…毎日作りたいです。誰かに美味しいって喜んで貰える料理
を少しでも沢山作りたい…」

蒼ちゃんは、薄茶色の瞳を真っ直ぐ僕に向けた。

その瞳は、恐怖を無理して堪え、挑み刺す瞳ではなく、目標に向け
て目指し挑む前向きな瞳だと僕は感じた。

「よし、じゃあ、これからがんばりましょう。よろしくお願ひしま
す」

そう言葉を渡すと、安堵と嬉しさとが胸に入り混じり、思わず顔

が綻んでしまった。

「良かつたじゃない？ 毎日彼女が作るご飯が食べられるなんてそんな幸せ、滅多にないわよね～」

葉月は充月君を見て、ニヤニヤとした笑みを向けた。

「ね…姉ちゃんだつて！ 每日洋一さんの作る料理食べてんだろーが…」

葉月のニヤニヤに耐えきれないと謂わんばかりに赤面して、充月君は鼻をひとつ鳴らした。

「そりやー 私は幸せ者よー どーだ、参つたか 」

葉月は、ははは～んと笑つてパスタを頬ばつた。

「…つーかさ、その幸せ者とやらが、北村さんから津山さんに転身する日が来るんだか…今世紀最大の謎だな…」

充月君はやれやれとため息をついた。

「ちよつと…それ、どーゆー意味よお…」

葉月はムツとして充月君を覗きこんだ。

「別に深い意味はない。ただ…」

充月君は一呼吸置いた後に、

「母さんが、苗字が変わる前に、孫ができました～ なんて事にはならないかと心配しててるって事だけは言つとく」

充月君は僕を見て、ふふ～んと笑つた。

「ちよつ…やだつ… ママ！ 充月にそんな事言つてるの…？」

「いや、俺にだけでなくね、時々親父ともそんな話して盛り上がりたりしてるよ」

「...」

僕は思わずパスタを吹き出しそうになつた。

「いい、いやいやいや！ ま、孫つて！ あの！ そんなつー。」

「え? だって、半年も同棲してんだから あり得ない事じやない

と思つんですが……

充用君は苦笑い気味で僕にそう言った。

「形而上者謂之道，形而下者謂之器。」

葉月はプレートの上でフォークを忙しなくまわしながら、照れく

やがて、

「えー…と…」

恥ずかしさが先に立ち、言葉がうまく繋がらない僕を見て、

「……オーナー……真っ赤……」蒼ちゃんはつぶやき俯いて、肩を震わせ笑いを堪える。

いだした。

回想2

「」の店の手伝いをやせても「」とを思って、そろそろ向かって行動を起したのは間違いじゃなかつたと思つた。

誤魔化しの仮面を被る「」となく、感情を押し殺して能面になる「」ともなく、蒼の中から本当に自然な感情が伺える。

初日から順調過ぎるくらいだなと思うところは少々あれど、やっぱりあいつのいろんな顔を見ると、俺はすげー嬉しいわけで。

厨房の右奥で姉は鼻歌混じりで食洗機の中の洗い物を片付けてる。歌つてるのは店内のBGM。姉が「」よなく愛してると豪語するロックグループのラブソングだ。

厨房の中央奥では洋一ちゃんと蒼がティータイム用のシフォンケーキを作る支度をしている。

真剣に、でもわくわくとした空気を醸し出しながら、洋一ちゃんの話を聞いて作業を見つめてる蒼を見ると、数日前の冷たくて虚ろな蒼の姿がまるで嘘みたいにも思えてくる。

（…わづ、あんな顔をせたくないな…）

わづ願うと同時に、心の中に何かが静かに沸き立つ感じがした。

少し時間を巻き戻して、夏休みが始まる数日前のことだ。期末テストを終え、休みまであとひとつ踏張りとこうといふやう

蒼はぱつたりと学校に来なくなつた。

蒼が休んだ初日、俺はいつも登校時に待ち合わせる歩道橋の下で蒼の到着を待つた。だけど、一向に来る気配がなく、ただ時間だけが過ぎていった。

勿論心配になり、蒼の携帯を鳴らしたら『風邪をひいた。休む』と体調不良を訴えた。

昨日までは何となく元氣にも見えたのに…。そんな違和感はあつたけど、俺はゆっくり休むようこと告げて電話を切り、学校へと自転車を走らせた。

授業を終え学校帰りに様子はどうかと思い携帯に電話をしても、蒼は電話に出なかつた。メールを飛ばしても返信がなく…。

その日を境に全くの音信不通状態になつてしまつた。

登校する朝と、下校した夕刻に蒼の家に行き、威圧感のある大きな門に備え付けられた呼び鈴を鳴らしたけど、まるで住人がいる気配がない全くの無反応で。

田を追う毎に不安だけが募つていく俺の気持ちと反して、その大きな扉は一向に開くことがなく、そして俺にはその扉を蹴り破る勇気も当然なくて…。

無言の門前払いを食らつて4日。正直俺は諦める心に負けそうだった。

こうしていくら俺が蒼を思つても考へても、結局は気持ちがちゃんと繋がるなんてことはなく、一方通行のままなんだなと感じてしまつたんだ。

1年のときは互いに隣のクラスで、蒼と初めて言葉を交わしたあの歩道橋の上の出来事から始まつた俺達。

それから登下校中や休み時間に交わす僅かな言葉を積み重ね、半年を経て2年になり、同じクラスになつて…。

その間に少し、また少しど縮んできたと思われた互いの距離は、その中で時折見せる蒼の小さな笑みは、偽りのものじゃないと願いたいけど、これだけ毎日あからさまに拒否されると、そんな願いも自信もぐらぐらと揺らいでしまつていた。

「結局…俺なんかじゃダメってことか…」

呟いたら、梅雨時のじめじめとした不快な暑さと反して、体から熱がどんどん奪われるよつた感覚になり、門を見つめていた視線がアスファルトへと下がつた。

「もう無理だな…」

ため息と同時に諦めのどん詰まりである言葉がアスファルトに落ちた。

開くことのない重い扉に背をむけ、自転車のスタンドを乱雑に足で払いのけて自転車にまたがつたら、「ふざけんな…」「どうじつうもなく苛々した。

自転車にまたがつたまま、ポケットから携帯を取り出して蒼にメールを飛ばした。

内容は

『いつもの歩道橋で待つてる　お前が来るまでな!』
とだけ打ち込み飛ばした。

空を見上げたら、どんよりと厚い雲。

まだ梅雨の明けない、予測不能の不安定な空模様。

どうしても折れそうな自分の気持ちに負けたくなかつたんだ。
諦めのどん詰まりなんてふざけんな！

どん詰まりなんてないんだ。あいつはまだちゃんと息して生きて
んだ。

『死ぬ気があつたらもつと早くてあの世に逝つてる』

あの日、蒼が俺に告げた言葉を思い出した。

『何も知らないくせに。知つたかぶりして近づいてくる偽善者なん
て大嫌い！』

あの時蒼は、自分を取り巻く全てを拒絶、排除する事で辛うじて
生きてた。

蒼が見せた真剣な瞳は、『この先もずっと続くだろう私の孤独を
何も知らないあんたになんか救えるわけがない』

そんな事を訴えるような瞳だつて感じたんだ。

俺はそんな瞳を向けた蒼に、

「偽善つてのは、人の為に善を尽くすことだと思つてゐる。よし
決めた！」

俺は蒼を見下ろして、ひと呼吸置き、

「お前が俺を知らない奴とかウザいとか思つたつて、お前との先
もずっと係わりを持つつて、たつた今決めたぞ！」

それは決して一時差し伸べる同情の手などではなく、だ。

そんな俺の言葉に蒼は、焦げ茶色の大きな瞳を更に大きく見開き、声無く俺を見上げた。

「だつて、お前…」

今まで、進藤蒼をずっと気ににして田で追つてたのに。
見て見ぬ振りしてアクション起こす事を諦め、言い様のない苛立ちを押し殺し過ぎしてた。

そんな俺が偶然にも事を起こし、ずっと続けたいって決定付けたのは、

「すげー泣いてんじやん…。そんな顔してる奴、ほっとけるかつーの…」

あの時蒼の泣き顔を見て、わかつたんだ。

なんで俺がいつも学校で苛立ちながらも蒼を田で追つてたのか…。

蒼の全てを救いたいなんて、大それた事はできないけど。
ほんの少しでもいい。
泣いたり笑つたり。

空っぽな蒼ではなく、そんな感情を出して『生きてる』蒼が見た
い。

そう思つたんだ。

「あの時と気持ちは変わつてないんだろ？」

俺は携帯を見つめて自分に問いかけた。

勿論答えは「YES」だった。

「充月～っ！ 彼女に見惚れてないで、ちやんとテーブル拭きなさいよっ！」

いつの間にか厨房からフロアに移動してきた姉が、笑いながら俺の背中をぺしゃりと叩いた。

「みつ、見惚れてねーしつ！」

不意討ちをくらいい、慌ててしまつた俺を見て厨房の洋一さんは小さく吹き出した。その隣で俺を指差して「また怒られてる」と言ひたげに小さくニヤニヤしてゐる蒼。

…お前…、絶対後で覚えてやがれ…。

弓きつり笑いを蒼に向けたけど、

（あの時、雨が降ろうが槍が降ろうがつて気持ちで蒼を待つてて良かったな…）

心の中で呟いたら、足取りが軽やかにならずにまいまられなかつた。

それが僕等だ

「いいにおい……」

シフォンケーキを焼くオーブンの傍で、蒼ちゃんが感嘆混じりでつぶやいた。

仕事も半日を終えて、だいぶ緊張が解けたのか、その表情はとてもナチュラルな感じに見える。

「焼けたら味見してみる?」

蒼ちゃんに視線を向けると、頬を緩ませてしつかりとひとつ頷いた。

厨房の中、時折すれ違はずまに僕の腕と彼女の肩が触れたりしたけど、心配したようなパニックには繋がらずになっかりと業務をこなす姿を見て、僕はこのまま順調にいけばいいなと小さく安堵した。

そんな順調そうな蒼ちゃんとは反して、シフォンケーキが焼ける時間が迫りつつあると共に、徐々に表情が強ばっていく葉月が気になつた。

シフォンケーキが焼けるという事は、言わずと知れた彼
はじめ君が来店するという事に繋がるわけだ。

(やれやれ…)

僕は床に小さく息をひとつひきました後「蒼ちゃん、ちよつとじめん。5~6分厨房から離れるね」と声をかけた。

蒼ちゃんは「はい」とひとつ返事をして、少し表情を引き締めた。

「大丈夫だよ、ちょっとフロアに行くだけだからね」
蒼ちゃんがひとり不安にならないようにと言葉を足すと、僕に小さく笑みを向けてひとつしつかりと頷いてくれた。

厨房から少し歩き、フロアの入り口。右隣のテーブル席の出窓に並んだ小さな硝子鉢のポトスを見つめて、葉月は険しい表情を浮かべている。

フロアに充月君の姿がない。しかし化粧室から物音がするということは、ティータイムが始まる前に、トイレ掃除に向かつたんだなと理解できた。

「葉月、看板娘がそんな顔してたらお客様の居心地が悪くなるから」
僕は葉月の肩に手を乗せて一言、なるべく蒼ちゃんに届かないよう声をかけた。

「……わかつてゐるよ……わかつてゐる……」

葉月は僕を見る」となくつぶやいて、深く息を吸い込み、ゆつくりと吐いて深呼吸をした。

「わかつてゐるんだけど……」

軽く握られた右手を口元へ添えて、少し視線を上げて窓の外を見つめた。

「……はじめ君が来る時間だけ、一人に休憩つて名前で散歩に出掛け
て貰つて……ダメかな……？」

どうやら葉月は充月君達とはじめ君を会わせないようになり」と
を考えてるようだ。

だけじゃねは…。

「それをここにくる毎日、彼らにやせらるのか?」

僕は葉月に問いかけた。

「だつて…」

「それは、彼女にとつて良い事なんだろつか…。何か良からぬ事が起ころんじやないかつて憶測だけではじめ君と敢えて距離を取ることは、僕は正直賛成できないよ」

加えて過度な防衛意識は、時として悪い方向へと作用するということを葉月に諭すと、

「でも…もし…」

葉月は不安げな表情で振り返つて僕を見上げて言葉を詰まらせた。

「もしもの時は、僕がいるから。頼りないかもしれないけど、守りたい人くらいはちゃんと守る気持ちでいるよ」

何となく浮かんでしまつた苦笑いを見て、葉月は、「ごめん…私、また…」一人で氣負い過ぎると言つたげな苦しげな顔を見せた。

「お願い、洋一…。私、せつかく見れた蒼ちゃんの笑顔を消したくない。だから一緒に…」

弱気な瞳で僕を見上げて、微かに唇を震わせる葉月を見ると、やれやれ…とため息混じりの笑みが落ちた。

葉月は本当に感情が豊かで真っ直ぐな^{ひと}女だ。だけど、時々ネガテ

イブに走って收拾がつかなくなることがある。

それはいつだって、自分の為ではなく、誰かを想つてのことばかりで。

でも僕はそんな葉月の優しいお節介が好きだつたりもして。

「大丈夫だよ。僕信じて。僕もちゃんと葉月信じてる」

僕は葉月の両肩に手を乗せて、精一杯の笑顔で一言告げた。

『僕に全て任せろ』なんて決して言うつもりはないし、僕には1人で何もかもを万全に背負う力はまだない。

何より葉月の考え方や事運びを否定なんて僕にはできないし、互いの主張を誇示してぶつかり合うなんて性格上無理だつてわかってる。だから、1人ではなく2人で。

互いに信じあい進みゆく僕等でいたいから。

勿論、ここぞという時は全力で大事なものを守るつて気持ちは楚としてあることは言うまでもない。

「1人で頑張るな。ちゃんと傍に僕がいる」

普段は中々真っ直ぐに視線を合わされることなんてできない僕だけど、本当に伝えたい気持ち、伝えたい想いを届けたい時にだけ。

僕は葉月と瞳を合わせて小さく笑みを向けた。

「洋一……」

葉月は目を見開き、一言しつかりと「うん、信じてる」と言葉と笑顔を返してくれた。

「……人きりなら……」の流れで遠慮なくギュッてできるのに……」
口を尖らせてつぶやく葉月を見て、僕は思わず照れ笑いしてしまった。

「よし……家に帰つたら、思い切り甘えてやるんだからあ……」
葉月はにしそうと笑つて、

「よし、頑張ろっ！」
と気合いを入れた。

「……すみません。お手柔らかにお願いします」
何となく謝つてしまつた僕の後ろで、

「はい～、イチャイチャタイム終～了～」

掃除を終えた充月君がクスクスと笑つて声を上げた。

「……チツ、お邪魔虫がきた」

葉月は憎らしそうに、しかし笑みを携えて充月君を見たけど、僕は赤面混じりの苦笑い……そして無言で厨房へと早足で戻つた。

フロアからケラケラと姉弟の笑い声が響く。

「……」

「……」

ふと蒼ちゃんと視線が合つた。

蒼ちゃんは口角の片側を小さく上げて「ふつ……」となま暖かい笑みを向け、

「全く……イチャイチャと……」
とつぶやいた。

「…すみません…」

何だろ？…。ついつい謝ってしまった僕だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3595v/>

summer visit

2011年11月11日02時29分発行